



タイトル Title	あるポストコロニアル・エリートの死 : ウガンダ東部パドラにおける葬儀の記録
著者 Author(s)	梅屋, 潔
掲載誌・巻号・ページ Citation	近代, 116:1*-74*
刊行日 Issue date	2017-09
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLDOI	10.24546/81009898
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81009898

あるポストコロニアル・エリート之死 —ウガンダ東部パドラにおける埋葬儀礼の記録—

梅 屋 潔

(調査協力 ポール・オウォラとマイケル・オロカ=オボ)

I はじめに

私は、1997年3月より現在まで、ウガンダ東部に拠点をおく西ナイル系民族、アドラ (Jopadhola)⁽¹⁾の間で社会人類学的なフィールドワークを行ってきた。その主たるテーマは、アドラの「宇宙論」(cosmology あるいは cosmogony)を民族誌的な手法をもちいて抽出することである。そこでは、「生/死」が「宇宙論」を構成するいくつかのモチーフのひとつとして必然的に浮かび上がってくる⁽²⁾。死を究極とする個人的な、そしてまた社会的な「災い」がいかなるものとして捉えられ、どのような対処が個人ないし社会によって行われるか、といった問題系から分析する「災因論」的な角度からの資料のほかにも [梅屋 2008, 2009]、葬送儀礼のプロセスについても関心を持ち、報告してきたのもそのためである [梅屋 1998a, 1998b, 2007, 2010, 2014, 2015]。葬送儀礼は、パドラのあらゆる活動のなかで目につく大がかりな行事のひとつである。現地にしばらくと滞在すると、近隣では数多く執り行われていることに気づく。通りをゴマス (*gomasu* ガンダ風の女性用ドレス。ガンダ語ではゴメス *gomesi*) で盛装した女たちが歩いていけば、ほぼ葬式と考えて間違いのない。葬儀はリエド儀礼 (*liedo*)、ジョウオ・ブル儀礼 (*jowo buru*)、ルンベ (*lumbe*)、オケロ (*okelo*) など葬式はいくつかの段階に分けられるが [梅屋 2014, 2015]、その最初のステージである埋葬を指してカリエリ (*kalieli*) または、イキロキ (*yikiroki*) という。カリエリは広義には、葬送儀礼全体のことを指すが、リエリ (*lieli*) は

遺体のことであるから、遺体にかかわること、の意である。イキロキはより直裁に埋めることを意味する。

私は、パドラ (Padhola, アドラの土地、の意味) に滞在中、数多くの埋葬儀礼に出席したが、ここでとりあげるウィルバーフォース・チャールズ・エドワード・カブル・オウォリ (Wilberforce Charles Edward Kaburu Owor, 1927.11.24-2002.11.2) ⁽³⁾の埋葬儀礼は、そのなかでも規模が最大のものであった。後に見るバイオグラフィでも了解されるように、故人は中央の警察官僚としてコロニアル／ポストコロニアル時代双方を生き (ウガンダの独立は1962年)、退職後はNGO その他で要職を歴任したこの地域を代表するエリートだった。式次第もきわめて整っており、マイクや巨大なスピーカー、そしてアンプを使用する司会 (MC: Master of Ceremony) の進行も非常に洗練されたものだった。

私は幸い、その参列時にずっと録音をし続けていた。その後、ポール・オウォラ (Paul Owora) の協力で、録音資料を逐語的に書きおこし、テキスト⁽⁴⁾を作成した。本稿では、テキストを追いながら、葬儀の流れを確認したいと思う。テキストは一続きの途切れない録音を起こしたものだが、まとまりごとに解説を付すことで、内容の理解と分析をしやすいように配慮した。

カブルの遺体は、前日2002年11月3日に入院先のムラゴ病院の4C病棟 (Ward4C) から、周囲からはオイ (BS: Brother's Son) ⁽⁵⁾にあたりと認知されているゴドフリー・オティティ・オボス=オフンビ (Godfrey Yolamu Otit Oboth-Ofumbi, 1964-) と、義弟と目されているオティティ医師 (Dr. John M.L. Otit, 1939-) が自家用車で運搬してきた。埋葬の予定は14:00とゴドフリーからは聞かされていた⁽⁶⁾。

2002年11月4日、9時過ぎに私が会場に到着したときには、屋敷の外れに墓穴が掘られ、棺の準備が進められていた (写真1、6)。屋内ではすでにきれいに背広を着せられたカブルは、寝室のベッドに寝かされており、花輪と肖像写真がその上に置かれていた (写真2、写真3)。やがて小屋の外には親族

とみられる女性たちが屯するようになっていた（写真4）。

10時過ぎに埋葬を印づけるジョンデイジョ（*jondeijo*）⁽⁷⁾が挽歌を奏で始め、アジョレ（*ajore*）⁽⁸⁾が歌われた。アジョレは、アドラに隣接するイテソの言語で、軍隊を意味する。かつて近隣民族との紛争で失われた命を想起するとともに、死という痛み、苦しみとの戦いが、歌い込まれている。地域によって歌詞にもバリエーションがある。アジョレは、現在でも戦いの記憶とともに歌われるとされ、戦いはいまだ終わっておらず、継続中であるという含意をもつダウィ・オニンド（*dhawi onindo*）という語を口にする。

楽団の歌に合わせ踊る女たちも歌詞を口ずさむ。

...wotomeran!

thwodhe oromo gi wadi yokoro

aa, aa, mama dhawi onindo kaa!

woto meran!

thwodhe oromo gi wadi yokoro

achulo banja machago akitimo!

wano kwongere gi yamo

kere dhawi onindo! olelo! olelo!

wodi mama kodhwoko, kere otho!

dhawi onindo kaa! olelo! olelo!

kere banja! kere banja!

dhawi onindo kaa! olelo! olelo!

wano kwongere gi yamo

dhawi onindo ochulere banja

nyath pa mama igalo kune mogwangi kayan ayino?

Kaburu（この部分は死者の名に置き換えられるのが通例である）*kodwoko*

kere banja!

aa, aa, mama kere banja, dhawi onindo! ...

[邦訳]

…きょうだいよ！

その戦いは、雄牛たちとそこで

ああ、ああ、母よ、また戦いがここに！

きょうだいよ！

その戦いは、雄牛たちとそこで

経験したことの無いような痛みを受けた

我々は死を呪う

その戦いがまた！オレロ！オレロ！（すすり泣く擬態語）

私の母の息子は戻ってこなかった、死んだのだ！

その戦いがまたここに！オレロ！オレロ！

痛み、そう痛みのため！

その戦いがまたここに！オレロ！オレロ！

我々は死を呪う

戦いはひとびとに経験したことの無い痛みをもたらす

そこから帰りの遅れた母の子は、野獣にでもやられたか？

カブルは（戦いから）帰ってこなかった、痛みのため！

ああ、ああ、母よ、かつてない痛みがここに、戦いはすでにここまで来た！…

その踊りに参加したのは、妻含め数名の老婆ばかりであり、私がこれまでに参列したほかの葬儀にくらべるとその部分がやや寂しい印象を持った（写真7、8）。その意味では、この盛大な埋葬儀礼のなかでは、ニャパドラ（アドラ流の、

の意)の部分はきわめて貧相だったといえる。

この時点ではマイクやアンプはテスト中であり、本格的にアナウンスは行われていない。葬儀が行われたカブルの屋敷と農場はオスクル準郡にあり、近隣住民のほとんどがテソ人である。また、仕事関係で参列した者はアドラに限らず、さまざまな民族の人間が参集しているのが見てすぐにわかった。

12:00になると家のなかでひっそりと賛美歌が歌われた。

録音は、カブルの屋敷のある農園で、2002年11月4日10:00ごろからのものである。

II テキスト

1 式次第と席次案内

M・Cの発言【英語による 以下Eと略す】：…本日皆様がこちらに足を運んだその儀式をそろそろはじめたいと思います。プログラムを読む前に、万難を排してのご来場の皆様にご感謝申し上げます。ご来場の紳士、淑女、様々なクラン・リーダー⁽⁹⁾、宗教的指導者 (canons) のみなさま、ご親族の皆様、そしてすべてのご来場ご参列の皆様。

私たちは、この葬儀を、完全にアドラ語で行うことにしておりますが (①)、もし、アドラ語がおわかりにならない方がお近くにおられましたら、これから話されることの要点をその方に解説していただけると幸甚です。

重要な点は、まず、第一に、もし、2つや3つの言語で進めることにしますと、私たちの本日ここで予定していることをすべて本日中に執り行なうことがとてもできないということでもあります。

もし、ただいまこちらにお越しになったばかりで、まだ遺体にご対面を果たしていらっしゃらない方がおられましたら、お屋敷の中へどうぞ。席をお立ちになり、ご対面の後にお戻りください (②)。

その次に、二つ目のご注意ですが、遺体の安置されている場所の特に近くにご

注目ください。皆様をご対面を果たした後に、来場のこの村の LC 議長により、この集会の開会が宣言されます (i)。そのスピーチの後に、ニイレンジャ・クラン (Niirenja Clan) のトロロの郡のチーフにお話いただき (ii)、続いてニイレンジャ・クランの判事 (magistrate) (iii) のお話とさせていただきます。判事は、故人の死を受けて、ニイレンジャ・クランの暫定的なクラン・ヘッドを拝命しております¹⁰⁾。

さて第 4 番目には、故カブル様のバイオグラフィをご紹介します。教会の儀式のなか、ティエン・アドラのご臨席のもとでバイオグラフィを読むことを (③)、先ほど、教会関係の方々とは打ち合わせしたところがございます。

クラン判事様のご挨拶のあとに、ご親戚のお話 (iv)、そして、故カブル様の治療に従事しておられたお医者様に、どのような病にかかり、ついにお亡くなりになったのかをご説明いただきます (v)。そしてその後、エイズの援助に尽力されている組織の方に (v)、故人をしのんで、故カブル様の人となりについてのお言葉を戴きます。

続きましてトロロ県の弁務官 (RDC: Resident District Commissioner) (vii) および、地方会議 (LC) 5 の議長 (viii) ¹¹⁾、そしてパドラの文化大臣 (vii) にご登場願います。文化大臣からパドラの総理大臣 (x) を、そして総理大臣に引き続きましてティエン・アドラ (xi) のお話を賜る、といった流れで、そのあとには儀式を教会にお返しする (④)、そういった段取りで進めて参りたいと思います。

もう一度申し上げます。もし、まだご遺体に最後のご対面をお済ませでないかたは、どうぞ、この間、次の式次第に移ります前にどうぞ足をお運びになって、遺体とご対面していただきますよう¹²⁾。

ここで、この会場の座席を担当されたオケロ・オウオリ氏 (Okello Owor) からご案内がございます。

オケロ・オウオリ (Okello Owor) [アドラ語による 以下 A と略す]:...レディー
ス・アンド・ジェントルメン (monidongo gi judongo)、座席について先に申し上げ

げたことを繰り返します。今、私は木陰を右に見て立っておりますが、私から見て左側の座席、これらは、教会関係の方の座席になっております (⑤)。私の前の座席は、親戚関係の方のお席となっております (⑥)。女性や子供は、そちらの敷物にお座りになることになっています (⑦)。もし、今申し上げた関係の方に該当しない方がおられましたら、申し訳ございませんがその場所からの移動をお願いいたします。クラン・リーダーの方々は、木の下におかけください (⑧)。

キソテ (Kisote) 氏が、クランの皆様からお金を徴収しに巡回しているはずであります。ニイレンジャ・クランの方は、キソテ氏まで、お金をお納めください (⑨)。

私の右側は、主賓席となっております。私どものご案内した方、またこれからそちらにお席をご案内いたします方々はそちらにおかけ願います (⑩)。それ以外のご参列の皆様は、左前方のテントの下に座席をお取りください (⑪)。席順はこのようになっておりますので、今申し上げた方々以外の方は、どうぞご自分で適宜お席におつきください。あちらの木々の下にも敷物と椅子をご用意してございます。以上で座席のご説明を終わります。

M・C [A]:...我々の恵みの愛に感謝しましょう。これほど大勢の方々のご参列は、その愛の大きさを示すものです。もし何かご不便があった場合には、深くお詫びを申し上げます。どうぞ、式次第がスムーズに進むよう、ご協力ください。お席から追い出すつもりはありません。ご親族の方をお願い申し上げます。ご会葬関係者の方でお立ちの方がいらっしゃいましたら、お席をお譲りください。ご親族の方は、こちらの屋敷の方は、お客様に席をお譲りください (⑫)。

クランの郡チーフ、LC 議長がおいででないようなので、まず、こちらにおいでになってお言葉をいただけますでしょうか？

【解説】

儀式の冒頭部の「式次第」にあたる部分である。M・C のオティエノ・アレ

ド (Othieno Aredo) 氏が式次第について、会場担当のオケロ・オウォリ氏が、席次について概説する。要点は、アドラ語で進行すること、その意味が説明され (①)、遺体への対面は各自済ませ、着席すべきこと (②)、弔辞は、予定では以下の 11 名。(v) の医師の診断は弔辞かどうか判断が分かれるところだが、当該医師の故人との関係 (一緒に家庭で育った義兄弟：後述) からして、弔辞の意味合いを含むと思われる。この時点で予定されていた登壇者は、(i) LC1 議長、(ii) クランの郡チーフ、(iii) クラン判事 (リーダー代行とあとで知れる)、(iv) 姻族、(v) 医師の診断、(vi) 故人が議長をしていたエイズ支援の NGO 関係者、(vii) 県弁務官、(viii) LCV 議長、(vii) アドラ・ユニオンの文化大臣、(x) 総理大臣、(xi) アドラの順に進める予定であることがアナウンスされた。バイオグラフィ紹介は、アドラ・ユニオンの長であり、パドラの「王」とも擬される、モーゼス・オウォリの到着後に読むことが宣言された (③)。

また、参列者の席次についても、主賓席 (⑩) の他、教会関係の席 (⑤)、親戚の席 (⑥)、クラン・リーダーの席が示され (⑧)、一般参列者の席 (⑪) と女子供のための敷物が指定された (⑦)。また、親族は客である参列者に席を譲るべきことが述べられた (実際このマナーは徹底しており、会場のどこにいても席を譲ろうとするので、儀礼の観察のために行動の自由を確保したい私としてはかえって閉口した)。

いわゆる、香典に当たる金銭、ペサ・マ・キカ (*pesa ma kika*)、あるいはガンダ語を用いてマブゴ (*mabugo*) は、ニレンジャ・クランではキソテ氏におさめるべきことがアナウンスされた (⑨) (写真 5)。

2 弔辞 クラン関係

(1) 弔辞 オボ・マウェレ (Obbo Mawele ニレンジャ・クランのトロロ郡のチーフ) [A] : ...クラン・リーダーの皆様、政府や教会の指導者の方々、その他ご参列の各位にご挨拶申し上げます。ニレンジャ・クランの名において、

また、当家の名において本日このお別れの場にご列席を賜り、私どもの死別の悲しみをともに癒やし、過ごしていただけますことを感謝いたします。これも、故人およびその家族が愛されているがゆえであると、なりかわりまして改めて御礼申し上げます。

私は、ここにニイレンジャ・クランのメンバーとしてご挨拶に立っているわけですが、そのクランはこのトロロの地域におりまして、私はその郡のチーフをしております、オボ・マウエレと申します。クランのリーダーの一人として(①)、このたび、この世を旅立ちました、そのメンバーのひとりであるカブル氏について少しお話しさせていただきたいと思います。本日私たちがお見送りする故カブル氏は、ニイレンジャ・クランのリーダーでした(②)。私たちは偉大な統率者を一人、失ったこととなります。私どもの郡のスタッフも、故人にはたいへんお世話になりました。ことに郡の外部からきた者がそうでした。もし何かいい考えが思い浮かんだら、このクラン・リーダーはすぐにわれわれに教えてくださいました。また、クランの発展に関係するさまざまなことなどについても、郡の私の部下たちが行うことを、絶えず励まして力になってくださいました。重要な会合に出席できないときにも必ず代理を立ててくださいました。彼は、真のリーダーというのがどうあるべきか、身をもって示してくれたのでした(③)。何か出費が必要なきには率先して出してくれるのが彼でした(④)。言いたいことは、彼がクランの長となった1983年の3月12日¹³当時には、そのようなリーダーシップを持った人は稀だったということです(⑤)。まさに彼がその強い個性で、このクランを変えたのです。そのようなクランのあり方に、ほかのクランも大いに影響を受けた、ということが出来ます(⑥)。彼はクラン・リーダーへの就任以来、クランを協力的な社会に作り上げました(⑦)。彼自身が何の利益も得ていないことを思うとき、またニイレンジャの人々が晩年の彼をあまり援助しなかったことを考えるとき、私は、心が痛みます(⑧)。彼はそのニイレンジャを作り上げる途上で、道半ばにして倒れたのです。ちょうど、私がマネージャーとして始まるは

ずだったプロジェクトもありました (⑨)。それらすべてを通して、彼はニイレ
ンジャ・クランを率いて、みんながついて行くべき道を示そうとしていたのです。
故人は、ニイレンジャを率いて、進むべき道を示すのだ、というモットーを持っ
ていた、とあってよいでしょう。このことによって、ニイレンジャは、憲法にのっ
とった国家のように、きちんとしたものになったとあってよいのです(⑩)。いまや、
それを率いていたクラン・リーダーが病に倒れ、リーダー不在と言われるかも知
れません。しかしわれわれの憲法にのっとして、裁判長である人物、あるいは判
事になっている人物がその代理を務めることになっています。ちょうど私がLC1
の代理をしているようにです (⑪)。しかし、代理は代理です。いまや、私は、他
の方に、この地方行政職もクラン・リーダーとしての地位も、ほかの人物対し
て開かれているということを申し上げたいのです。それが故カブルの意志でもあ
りましょう。この地位は非常に名誉ある地位であります。私はここでクランの最
高評議会委員のオゲンダ (Ogenda) 氏に代わりたいという意思を表明しておきま
す (⑫)。彼の靴は私には大きすぎるが、オゲンダ氏ならまっとうすることができ
るでしょう。ご清聴ありがとうございました。

M・C [A]：…トロロのニイレンジャ・クランのチーフでした。どうもありがと
うございます。

【解説】

弔辞を読んでいるのは、故人が属していたクランの郡レベルのチーフ。故人
もその一員でもある (②) クラン・リーダーのひとりとしての発言である (①)。
道半ばでたおれたとはいえ (⑨)、故人が示した、クランを協力的な社会に作
りあげたリーダーシップ (⑦)こそが、その時代には稀なものであり、リーダー
シップを考える際のひな形でありうること (⑤)、国家における憲法に比する
ことができるような、クランの成り立ちに輪郭を与えたことが讃えられる (⑩)。

また、それがクランの範疇を超えて、別のクランにも影響を与えたこと (⑥) に言及する。具体的には、出費が必要なときは率先して用立てる (④)、重要な会合には出席しやむを得ず欠席するときには代理を立てるなどの仕組みを整え (⑪)、リーダーたるものはどうあるべきか、身をもって示してくれたということが指摘される (③)。

一方で、クランによって故人に反対給付がなされていないことが述べられ (⑧)、さらに代理ではなく故人のあとを継ぐ後任としてオゲンダ氏を任命することを公言した弔辞である。

クラン・リーダーの創設は比較的新しく、ガンダ王国始めとするバンツウの影響であると見られている。アドラ・ユニオンが、その憲法のなかで、公認しているクランは53ある¹⁴⁾。父系「クラン」、ノノ (*nono*) は、祭祀装置であるクヌ (*kunu*) があり、埋葬の際に遺体の頭部を向ける方角も違い¹⁵⁾、葬式の式次第の細部も異なっている。

すべてのジョノノ (*jonono*) (クラン構成員) は、村ごとに、ジャキシコ (*jakisoko*) というクラン・リーダーがおり、ジャムルカ (*jamuluka*)、ジャゴンボロラ (*jagombolola*)、ジャサザ (*jasaza*) など、行政区単位ごとにいるクラン・リーダーのもとに統括されている¹⁶⁾。最高位は、クワル・ノノ (*kwar nono*) である。アドラ・ユニオン創設後は「アドラ」の称号をもつモーゼス・オウォリがつとめている。葬儀の際にもかならず死因の説明でノノ代表者が出て公のスピーチを行うので今回の弔辞は、こうした性格ももっている。裁判 (コティ *koti*) の際にも同じように段階を踏んで法 (チク *chik*) を管理するシステムがある。また、「呪詛」や、ルスワ (タブー侵犯による厄災) に関するチョウイロキ (*chouiroki*) (祓いの儀礼) など、クランの秩序がかかわる儀礼にもこの代表者が立ち会う。次のスピーカーが裁判長であるのも、こうしたクランの管理システムを反映したものである。

長老会議 (*baraza*) もあるにはあるが、クランをまたいで行われるものは地

方行政単位で開催され、形式的な側面が強く、現在では積極的な機能を果たしているとはいえない。

(2) 弔辞 フリスコ・オコス (Frisco Okoth ニイレンジャ・クラン裁判長)

M・C [A]：…続きまして、ニイレンジャ・クランの裁判長に故カブル氏を偲ぶお言葉をいただきたいと思います。

frisco・okos [A]：…ご列席のさまざまな宗教的指導者の皆様、ニイレンジャ・クランの、またその他のクランの指導者の皆様、アドラ・ユニオンの指導者の皆様、そして、この故人の遺族、姻族の皆様、またその他ご来場の皆様に改めてお悔やみ申し上げます。

私は、この場に、ふたつ、あるいは3つの立場で立っております。

まず第一には、ニイレンジャ・クランの同胞としてのものであり、その立場で喪に服しております (①)。第二に、私は親、そして父親を失った子として、悲しみにうちひしがれております (②)。最後に、もっとも大きな役割ですが、すべての弔問のお客様を、ここに眠る故人、やがて埋葬されるべきクラン・ヘッドの名の下にお迎えする喪主としてのものがございます (③)。故オムイエ・マウエレ (Omuye Mawelle) は、名代として、お互いに握手できなかった多くの人々の代わりに私を派遣されました。私は、皆様にここに眠る故人の前に参集していただくためのトランベットの役割を果たすために遣わされたのです。

今お話しさせていただいている私は、frisco・okosと申します。私は故人がクラン・ヘッドを務めていたニイレンジャの裁判長を仰せつかっております。われわれのクランでは、このような場では、通常クラン・ヘッドである故人が挨拶するのがならいで、本来ならば私が出る幕ではなかったわけですが、死は、いろいろなことの順番を狂わせてしまいます。そうした問題が起こった時のために、ニイレンジャ・クランでは、クラン・ヘッドがなくなったときには、誰が代理を務めるかあらかじめ規定してありました。ニイレンジャにおける判事

を務めているものがその任に当たることになっているのです (④)。

皆さま、今日私たちニイレンジャは大きな損失を経験しております。我々の父であり、祖父である、カブルの死は、これからニイレンジャを続けざまに襲う不幸の前触れかもしれません。クランの副ヘッドの死からも、まだそれほどたっていない。その時には、今ここに横たわっているカブルが、閣僚を集め、誰を代理に任命するか、決めたものですが、そのカブルも死んでしまいました。これらのことは、ニイレンジャにとって大きな問題で、大変な危機に間違いありません。生きているものは、それぞれお互いに手を取り合って支えあっていくしかないように思われます。

ここで申し上げるべきことはそれほど多くないのですが、2、3のことを述べておきたいと思います。クラン・ヘッドがなくなり、その補佐もなくなりましたが、クラン・ヘッドのポストは生きています。カブルが病に倒れた後も、その機能はきちんと果たされていました。このお方は、亡くなる前に、ニイレンジャにかかわるすべてのことをやりおおせていたのです (⑤)。

クランの中心人物たちを呼び上げて皆さんにご紹介します。アツアルコ・オムニエ (Atsaluko Omunye) 氏は、ニイレンジャの文化保存と、公序良俗教育についての責任者です。オベンディ・コシア (Opendi Kosia) 氏、オヨ・オシガ (Oyo Osiaga) 氏もクランの大切なメンバーです。事務総長、どこでしょう？姿をお見せください。彼が事務総長のオウォリ・オゲン (Owor Ogen) 氏です (⑥)。このように、その席は継承されてゆきます。今カブル氏は埋葬されますが、彼の果たした役割は、このように継承され、休むことなく機能しているのです。明日、カブル氏の閣僚がここに集まって会議を行い、カブル氏がその命を終えたあとに、何が語られるべきか、そして彼がニイレンジャをいかにその柱として支えてきたか、その業績が検討されるはずです。私たちはここにいるのは、このように、私たちにふりかかるさまざまな問題を受け止めるためであるのです。カブルが率いていたニイレンジャは、4つの郡にまたがっております。すでにスピーチしたオボ・

マウエレ (Obbo Mawele) 氏が率いるトロロ (地名、カウンティ) を筆頭に、ジョン・オボ・ムジャシ (John Obbo Mujasi) がヘッドであるムランダ (Mulanda) (地名、サブ・カウンティ)、ピーター・オブル (Peter Oburu) が長をつとめるイヨルワ (Iyolwa) (地名、サブ・カウンティ)、またソニ (Soni) (地名、パリッシュ) にはオロカ・オドゥラ (Oloka Odula) がいます (⑦)。すべてのニイレンジヤの長老たちにお願ひしたいのは、皆さんの郡のクラン・リーダーに何かと用向きがおありの場合でも、今後、2日間の間、お待ちいただきたいのです。2日待てば、元通りに機能することをお約束いたします。クランの指導者たちよ。私たちは、何かをはじめるときにはいいことも悪いこともあるのが普通で、スムーズにいかないことがよくあることだと言うことを知っています。そこを知恵を使って何とか解決するわけです。そうしないと不満はすぐに争いごとにつながってしまいます。さて、参列の皆様。私はすこし喋りすぎたようです。今日は、スピーチする場ではありません。それは明日またここで行うことにして、われわれニイレンジヤの発展に何かアドバイスをくださろうと考えている方は明日どうぞ議論にご参加ください。クラン長そして要人は、午前 8:00 前にここにお集まりください。後継者が指名され、髪の手が剃られる前の時間です (⑧)。皆さん喪に服しておられるわけですから遠方の方もお帰りにはならないでしょう。この場所でもとに一夜を故人を偲んで明かしましょう。ありがとうございました。

【解説】

弔辞を読んでいるのは、クランの裁判長である。故人との関係は、父子であるというのが (②)、こうした場合、比喩的な親子関係なのか、同じクランのなかでも近いとのことなのか、あるいは実際の血縁関係にあるのかは、この文脈では不明である。当然のことだが、弔辞を読んでいるフリスコ・オコスは同じニイレンジヤに属するクラン・メンバーでもあるのでその意味でも弔意を表している (①)。

葬儀の喪主は、クラン・ヘッド（クラン全体のリーダーを特にクラン・ヘッドと呼ぶこともある）が務めるべきことが知られる（③）。本来は、ここではクラン・ヘッドが弔辞を読むはずだったが、今回は、そのクラン・ヘッドこそがカブルなのであり、故人である。クラン・ヘッドの代理は裁判長という決まりなど（④）、故人が、そうしたケースに誰が代理すべきかといったことを含めクランの仕組みづくりに尽力した人物であるということが紹介された（⑤）。ここで、frisco・オコスは、文化担当や事務総長、クランの中心人物の名前を読み上げ（⑥）、さらにその分布域に応じて、それぞれのテリトリーの代表者（チーフ）を読み上げた（⑦）。

最後には、翌日行われるはずのリエド儀礼への参列が訴えられた（⑧）。通常はその儀礼では、死の原因についての公式見解がとりまとめられ、ムシカ（*musika*）やムクザ（*mukuza*）の指名などが行われる⁷⁷。

3 アドラ到着

M・C [A]：…レディース、アンド、ジェントルメン（*monidongo gi judongo*）、私たちのティエン・アドラが到着したようです。立ち上がってお迎えてください。拍手を。お座りください。女性はユーヤレイションを。

【解説】

ここで弔辞の間を縫ってまでM・Cに到着がアナウンスされた「アドラ」と「アドラ・ユニオン」（ティエン・アドラ）について解説しておこう。アドラという民族がいかなるプロセスで形成されたのかという問題については、口頭伝承にもとづいて、歴史学者たちによって推測されている。その成果によれば、アドラのなりたちは寄せ集めであり、政治的には「無頭的」であり「脱中心的」で、隣接するソガ（*Basoga*）と比してもそれぞれのチーフの権力の及ぶ範囲はきわめて限定的であったとされる。ここで扱うクラン・リーダーのような指導

的立場も公式的にはごく最近まで制度化されていなかったとみられる。創設者とされるアドラを別格にすると、現在では保護領化される直前に超自然的な力をもって統率力を示したといわれるマジヤンガが記憶されているに過ぎず、何人か記憶されている首長、ルウォース (*rwoth*) らは、クラン・リーダーたちによってそれぞれ部分的に記憶、伝承されているにすぎない。

90年代に、アドラと同じく西ナイロートで伝統的には脱中心的な政治機構をもっていたはずのアチョリガルウォト (*rwot*) というタイトルを最高首長 (*paramount chief*) として戴き、ランギが同じく最高首長を、東ナイロートに分類されるテソまでが、エモルモル (*emormor*) という文化的リーダーをあいっついでウガンダ政府に承認させるという流れがあった。それぞれの民族がその国内的な存在感を公式的に確保してゆく動きに対応して、アドラでもルウォースを頭に戴く「アドラ・ユニオン」設立に向けていくつもの活動がみられた。当初はアドラのホームランドであるナゴンゲラを中心に社会調査を行い、49～51のクランを同定した。続いて、1998年9月19日に52のクランのクラン・ヘッドが参加した選挙を行い、奇妙なことだがルウォースや「首長」ではなく「王」としてモーゼス・オウォリが選出されたのである。この選挙については、「ジョバドラが王を選挙する」としてウガンダの代表的英文紙『ニュー・ビジョン』(*The New Vision*) 1998年9月16日号にも報じられた。

候補者は、本稿では埋葬される当事者として焦点をあてているニイレンジャ・クランのエドワード・オウォリ・カブル (*Edward Charles Owor Kaburu*, 1927-2002)、バンド・クランのモーゼス・オウォリ (*Moses Owori*, 1926-)、ニヤポロ・クランのS・K・オロウォ (*S.K.Olowo*)、ロリ・クランのロジャース・ジャサ・クウェロ (*Rogers Jassa Kwero*) の4名であった⁸⁸。

県会議事堂 (*District Council Chamber*) でおこなわれた選挙の結果はモーゼス・オウォリ候補が得票数1位で「アドラ」となり、組閣のプロセスで2位のジャサが首相に任命された (ジャサがカブルに先立つこと数週間前に亡く

なっていることは、本稿所収の一連のスピーチでもたびたび言及される)。

カブルはTASO (The AIDS Support Organization) ⁽⁹⁾の長として活躍していたが、すでに高齢であり、早くからモーゼス・オウォリの支持を表明していたとされる。カブルは、イディ・アミン⁽¹⁰⁾がクーデターを起こした1971年に一度公職を退き、1979年に再び地方警察に返り咲いた経歴を持つ。最終的な官職は副警視総監 (AIGP: Assistant Inspector General of Police) と言われていたが、この日読まれたバイオグラフィで言及された官職は、警視正 (Senior Superintendent of Police) だった。

モーゼス・オウォリは、独立前夜の1950年代を保護領の地方公務員として過ごし、1960年代前半を県公務員として、1965年より労働省職員として中央政府に転じた。アミン政権下で労働省次官を務め(1974-1977)、その後ILO/UNDPで労働管理の専門家として講師や委員会の議長として活動していた。「アドラ」に選出されたのは、中央政府との人脈が期待されたものだと考えられている。以後はウガンダ国内でも無視されえない「カルチュラル・リーダー」としてさまざまな式典に出席し、現在では絵はがきになっているほどである。

晩年故人が熱心に「アドラ・ユニオン」の運営にかかわっていたこともあってこの葬儀は「アドラ・ユニオン」を中心に回っているところがある。厳密に言うと「ティエン・アドラ」は「アドラ・ユニオン」の別名であり、オウォリの呼称は、「アドラ」であるとされているが、しばしば混同される。

4 弔辞 姻族

弔辞 オチュウォ・ダウディ・マコラ (Ochwo Daudi Makola 姻族 (ori) 代表)

M・C [A]: ...ありがとう。続いては姻族に登壇願って、お言葉をいただきたいと思います。

オチュウォ・ダウディ・マコラ [A]: ...宗教的指導者たち、そしてニイレンジャ・クランのみなさん! 詳しく語るつもりはありませんが、われわれがここにともに

いることはひとつの大きな成果です。すべての参列者の皆様、ここにお集まりになったのは、主の名のもと、主の御心のなさしめるところであります。誇りとともにその名を讃えましょう。

レディース、アンド、ジェントルメン、皆様とご一緒できて幸いです。ここにいらっしゃる多くは私をご存じだと思いますが、ご存じない方もいらっしゃいます。私はオチュウォ・ダウディ・マコラ (Ochwo Daudi Makola) と申します。パヤ (Paya) からやってきました。ビランガ・ニヤカンゴ (Biranga Nyakango) ・クランの者です。ニイレンジャからみますと、正直言いまして「上からものを食う者」(jie maju chamo gi malo malo) です (①)。ニイレンジャの方々は、姻族の土地であるパヤに関して、完全にその義理を果たし、大きな貸しができたというのを、ここに強く申し上げたいと思います。もし敬意を示してくださるならば、近隣の方々も友人たちも一緒に訪れていただきたいものですし、その折には、われわれの数万の仲間でもてなすべきなのでありますが、昨今では、なかなかそうもいかず、この機会をとらえてこのように申し上げているのです (②)。故人、エドワード・オウォリ・カブル氏は、私の姉妹ジェシカをめとり、30年以上の長きにわたり、一彼らが結婚したのは1960年ですから一結婚生活を送っております。神の御心をもって、彼らは子供を数多くもうけました。神の思し召しですでに召されたものもおりますが、3人の男の子と3人の女の子が生きています。ごらんにいれましょう (③)。それからその姉妹たち、兄弟たちもおります。それではビランガ・ニヤカンゴのメンバー、つまりジェシカの姻族は、立ち上がって皆さんに姿を見せてください。ナゴンゲラ国立教員養成校の校長、オボ氏 (Obbo)、ケネス・マコラ (Keneth Makola)、その兄弟もおります (④)。着席ください。

この私たち姻族の、ニイレンジャ・クランに対する借りについて私が言おうとしているのは、故人の死は事実ですが、私たちは続けてニイレンジャ・クランのために祈る、ということです (⑤)。もっとも重要な人物を失ったのは事実ですが、それは主が何らかの計画があつてのことです。私たちはひきつづき、隣人と、親

戚、そして友人のために祈ります。私との関係はさまざまな、親戚たちのために祈りたいと思います。私はパヤの姻族ですが、その他の場所から、遠い場所からおいでの姻族もあることでしょう。私たちにできるのは、このエドワード・カブルの屋敷の子孫たちに神がよりよいお導きをし、参列者ともども、この喪失にもかかわらず、ともに友人としてあるように思し召してくださるよう祈るだけです。昼夜お守りくださる主、イエス・キリストの御名によりて、皆様がすこやかでありますように。

ご静聴ありがとうございます。どうもありがとうございます。

【解説】

結婚によって発生する親族、すなわち姻族との関係の難しさは、アドラでもしばしば話題に上るものだ。ここでも、「上からものを食うもの」という比喩からも、すでに紹介したアジョレでしきりに歌いこまれる姻族が訪ねてきたときのみ用いられる食器、アチェロなどの存在からもそのことがうかがい知ることができる^(①)。しかもアジョレの歌詞では、死によって姻族のためのアチェロが「乾く」つまり供すべき食べ物がなくなるという比喩を用いて姻族との関係がおろそかになることを恐れる価値観が歌いこまれている。

しかし、カブルは、その難しい姻族との義務を果たしたとされる。その評価は、とりわけこのスピーカーの居住するパヤのピランガ・ニヤカンゴ・クランの人々は、故人が亡くなってなお、ニイレンジャのために祈る^(⑤)、という表明にあらわれていよう。その評価の根拠となっているのが、ピランガ・ニヤカンゴ出身のジェシカとの30年以上に及ぶ結婚生活と、二人の間にもうけた子供たちである。カブルがある程度長命であったぶん、すでに他界したものも多い^(③)⁽²⁾。姻族の紹介を兼ね、またそのなかにも重要人物がいることを示唆しつつ^(④)、故人の姻族との関係が非常に良いものであったことを示す弔辞である。

M・C [A] : ...姻族代表、ありがとうございました。お言葉は実に、よいお言葉でございました。それでは進行させていただきます。故人のそばで、故人を看取った医師として、一言いただきたいと思います。

たった今、労働担当大臣のジョセフ・ヘンリー・オボ (Joseph Henry Obbo) 氏が、県弁務官 (RDC) とともに、そして、LC 5 議長と副議長が、秘書官一名を伴って到着されました。拍手でお迎えてください。ようこそいらっしゃいました。

それではオティティ医師、ご面倒でも一度こちらにいらして、お言葉をいただきたいと思います。

進行表では、11:00 から始まりまして、現在、ニイレングャ・クランの郡のチーフ、そして姻族のご挨拶が終了したところです。

5 医師の診断と弔辞

オティティ医師 (Dr. John M. L. Otiti) [E]⁰² : ...ティエン・アドラ、そして私たち遺族に敬意を表し集まってくださったすべての方々にお礼申し上げます。この困難な時をともに過ごして下さるために足を運んでくださった方々すべてに感謝します。

カブル氏は、若者たちがそうありたいと見習うべきよい見本であり続けました。勤勉という考え方、清廉潔白で真に正直な、というのがこの 1942 年からまさにいま神が彼を連れ去るまで彼に関して私が知っていることです。

皆様方すべてが彼がこの地で努力していたことをご存じでしょうが、白人が常々言いますように、成功した人、努力した人の背後にはそれを支えた女性、妻がいます。そのことは必ずしもつねに認識されることではありません。私はこの機をとらえて、ママ・ジェシカと、ママ・フランチェスカにかくも長い間、この偉大な人物のそばでその仕事、そして暮らしを支えてきたことに関して感謝の意を表したいと思います。ことに、故人が病に苦しむようになってから最後の 2、3 年の

介護は大変だったでしょう。最後にムラゴ病院に運び込まれたときまでに、彼らがどんなに苦勞をしてきたか、余人の理解を超えるものであったでしょう。しかし、今やそれから神が解放してくださいました (①)。

知られるように、故人は生前、高血圧に悩まされ、近年は、腎臓機能が思わしくありませんでした。やがて病が彼をむしばみはじめ、脊髄や頭蓋骨が、おかされていきました。調査の結果は出ておりませんが、おそらく、これは癌でしょう (②)。いずれにせよ、神は彼を連れ去りました。私たちは彼を誇り、その残してくれた見本に従って生きなければならないということでしょう。

余計なことと思われるかも知れませんが、もう一言申し上げます。多くの方はご存じのように、私は単に一スピーカーではなく、もっと現実に故人とかかわっておりました。その立場から申しあげています (③)。私たちは故人と、老齡が私たちをここまで弱らせてしまった、と近頃話し合っていたところでした。ニイレンジャ・クランを代表して、ちょっとだけ昔に戻って、協力を、何かを力を合わせて成し遂げる、ということをお願いしたいと考えています。それはできないことではありません。なにも、嫌みを言っているわけではありません。事実です。ほんの数分前、墓の作業をしようと、何人かのニイレンジャの若者に声をかけたのですが、全く集まりはしませんでした (④)。ニイレンジャではない若者のほうがずっとよく働いてくれました。このようなことでは、どこのクランのものと結婚するとしてもニイレンジャよりはずっとましでしょう (⑤)。自分が座る椅子を探すより先に、何ができるか尋ねるべきでしょう。そんなメンタリティがニイレンジャに蔓延しているとすれば、ティエン・アドラに知ってもらわなければなりません。パドラには、好ましくありませんから (⑥)。他人を助けるために何ができるかを考えるべきです。クラン、あるいはパドラが自分に何をしてくれるかではなく、クラン、そしてパドラのために何ができるか考えるべきです (⑦)。ありがとうございました。

M・C[A]:...オティティ先生、ありがとうございました。オティティ先生は昨夜7:30

に遺体を搬送して参りました (⑧)。彼が今回故人のためにしたことははかりしれないものがあります。ご会葬の皆さん、拍手でオティティ先生のひとりのアドラ人としての功績を讃えましょう。オティティ先生、ありがとう。神はあなたを讃えるでしょう。この屋敷の発展のためにこれからも協力をどうぞよろしくお願いいたします。

まもなく何名かの来賓がお帰りになりますが、驚かれないようお願いいたします。RDC および LC 5 議長は、要人が県を訪問するため、まもなくこの場を去らねばなりません。どなたさまもどうぞお気落ちなさりませんように (⑨)。その前に、故人を偲んでお言葉をいただきます。

【解説】

医師の診断と表向きにはなっているが、オティティ医師は故人とは一緒に育った血のつながっていない兄弟のような関係である。また、カブルが息を引き取ったムラゴ病院にほど近いキラ通りにクリニックを開いており、遺体搬送はゴドフリーと共同で行われた (⑧)。

遺体搬送は、もっとも気を遣う作業である。病院で亡くなった場合には、遺族は大声をあげて嘆き悲しんではならない。死霊を驚かせるかも知れないからである。遺体は埋葬されるべき場所にそっと迅速に運搬されなければならない。それは出身村の、故人の父親ないしオジが最初の妻のために小屋を建てるようにと祝福してくれた場所であるのがふつうである。そこに到着してはじめて、遺族は声をあげて嘆き悲しむことが許されるのである。遺体搬送した車両は、そのタイヤで卵を三つ踏みつぶすことが必要とされ、運転手には鶏一羽が与えられるなど、儀礼的な処置も要求される。

オティティ医師の (そしてアミン政権時の国務大臣であり、アミンに殺害されたとされる A・C・K・オボス=オフンビの) 実父であるセム・K・オフンビが、幼いころにカブルを引き取って育てたといわれている²⁹。このことは、周

囲ではよく知られた事実である。そのあたりが、③で微妙な表現で表されているといえそうだ。ここでは、カブルの正式な妻二人の労をねぎらい (①)、「調査の結果は出ていないが、たぶん癌」ときわめて根拠に乏しい診断を下しているが (②)²⁴、むしろ非常に大きな比重を現在のニイレンジャ・クランの若者批判に置いている。墓堀りに協力を求めたが集まらなかったことなどを挙げて (④)、ニイレンジャと結婚するよりは別のクランのものと結婚するほうがましだ (⑤)、とアドラ・ユニオン向けに (⑥) こき下ろしている。最後はケネディ米国大統領の演説をもじって大いに嫌味を言っている (⑦)。

しかし、同じクランのものが墓穴を掘る作業を手伝う慣習はなく、葬儀の参列者は、墓堀りなどの作業への従事を忌避する慣習があることを知るなら、こうした批判は必ずしも正鵠を射たものとはいえないかもしれない。このあたりの墓穴を掘る作業をめぐる民俗宗教的な背景をうかがうことができる記述が、オティティ医師の実兄である、オボス=オフンビの報告に見られるのは皮肉である²⁵。

すでにわかっている RDC や LC5 議長といった要人の離席をあらかじめ M・C が指摘することで無用の混乱を避けようという配慮もみることができる (⑨) が、これも医師の死亡確認といった事務連絡的な部分とは親和性が高いので流れとしては非常に自然なアナウンスとなった。

6 弔辞 TASO と技術訓練校²⁶

M・C [A]：…また、私たちは「エイズ支援組織」TASO から手紙を受けとっております。オブル・ドーソン (Oburu Dauson) さま、立ち上がってお姿をお見せください。この方が故人に代わり新しく TASO の諮問機関の議長に任命された方です (①)。

TASO の会長のお手紙を読むようにオブル・ドーソンさんはおっしゃっています。ご本人からも後ほどお言葉をいただくことにしてまずはお手紙を紹介いたし

ます。

TASO 代表からの手紙 [E]

故カブル・オウォリのご遺族の方々に衷心より、イエス・キリストの御名によりておくやみ申し上げます。友人であり、HIV/AIDS に対する戦いに関する戦友であり、TASO トロロの設立メンバーでもあり最初の議長でもあった、TASO 一家の長老の突然の訃報は、深い悲しみと衝撃を私たちに与えました。TASO ウガンダ有限会社とくに TASO トロロのスタッフ、クライアント、代表者を代表し、中央アドバイザー・コミッティー上級官 (Chief Executive Officer of Central Advisory Committee) として、ご遺族に心よりお見舞い申し上げます。主が彼に永遠の平安をお与えになりますように。代表者がなにかメッセージを述べるはずですが、それは神のしるしとなるでしょう。遺族の皆様は、主が与えたしるしを受けとることになるでしょう。

TASO 代表 アレックス・G・コウティノ博士 (Alex G. Coutinho) ²⁷⁾

(2)。

M・C [A] : ...1991 年に TASO が設立され、1994 年に引退にともなって議長が交代するまで、故人は TASO トロロの最初の議長を務めていました。AIDS 患者が治療を受けている新しい建物は、彼が力を注いで建設を実現したものです。また、命を長らえるのに必要な医薬品の確保にも尽力されました。故カブルは、この得がたい人徳を、神に感謝し続け、その魂が、永遠に安寧であるように、その遺族のために祈り続けましょう。

それではドーソンさん、よろしく願いいたします。

(1) 弔辞 ドーソン・オブル TASO トロロ議長 [E] : ...アドラ閣下、奥様、

労働相、ジェンダー相、経済開発相、RDC、LC5 議長ならびにすべてのご参列の各位、僭越ではございますが、TASO を代表しまして一言ご挨拶いたします。これはいま読まれました弔辞にいくつかのことをつけ加えることになります。手紙で読まれたように、カブル氏は、TASO トロロの設立メンバーのひとりで、最初の議長でした (③)。その当初も、現在に至るまで HIV/AIDS との戦いにおいて欠くべからざる戦力であり続けていました。

今朝、私はカンパラの TASO 事務局から彼の死を電話で知らされました。あいにく、代表のコウティノ医師も不在でした。またコウティノ医師が残っていたスタッフたちも、今日参列に代表者を送ることはできないということでした (④)。かわって私が、TASO を代表して、彼ら全員がこの死に際し、深い悲しみにうちひしがれていることを改めて申し上げます。コウティノ医師もご遺族にも改めてお悔やみを申し上げに参ることでしょう (⑤)。カブル氏は、TASO の議長であるだけでなく、私にとっては、妻のオジにあたります。ムコ (muko) ^⑧ です (⑥)。ですからご一家とはきわめて近いおつきあいをさせていただいていたわけであり、このたびカブル氏を失った悲しみは筆舌に尽くしがたいものがあります。ただ神に永遠の安寧を祈願するだけです。

M・C：...どうもありがとうございます。ドーンンさま。ドーンン氏は、故人の姻族でもあり、TASO の同僚でもありました。

(2) 弔辞 ポール・エティヤン (Paul Etyang) イヨルワ技術訓練校関係者

M・C [E]：...続いて、故カブル氏の友人のひとりでもあるポール・エティヤン (Paul Etyang) 氏にご登壇いただいて、故人の思い出を語っていただきましょう。

ポール・エティヤン [E]：...アドラ閣下、労働担当大臣、LC5 議長、RDC、そしてその他ご参列の諸先輩方各位。私はこのたびは皆様にお目にかかるために参ったわけではありません。私たち誰にでも訪れる死が、私たちの友人に訪れたことを、

ともに悲しむためにここにまいりました。

カブルについてここですべてを語り尽くせるわけありません。ここでは、警察官としての、彼の卓越したキャリアについて一言したいと思います。警察官、あるいはその他の公職の汚職と聞くと、私はカブルのことを思い出します。カブルほど、そうした問題に一家言持ち、厳しく立ち向かったものはおりませんでした。カブルは、警察の中でのそういった問題の再教育にも携わっていました (⑦)。

私たちは親しい友人としてつきあっていましたので、この屋敷は我が家のようなものです。二人とも停年を迎えて、週に一度とは参りませんが、ときおり、ここか私の家で、奥様を交えて会っていました。言い換えると、公職を去った後の農家暮らしを、ともに楽しんでいたともいえるでしょう。もちろんカブルは農業でも際だった実績をあげておりました (⑧)。

カブルは、多くの人を持っているコンプレックス一部族主義、宗教などあるいはその他の思い込みの類いも含めて一は一切もっておらず、清廉潔白な人間でした (⑨)。見たままに清廉潔白で、見たままに健康でした。実際病気のことは口にしていますが、一切不満がましいことは聞いたことがありません。私のようなごく近い友人にさえ、高血圧で余命幾ばくもないなどということは言わなかったのです。数週間前に、ここカムラゴに見舞うことを約束したのに、それが果たせなかったのが残念です (⑩)。どうしても手が離せませんでした。2ヶ月間ある仕事をしていて、それが終わったら、別の仕事がありました。ご存じの方もおられるでしょうが、結婚式、披露宴など、このたびの葬儀同様大変なものでした (⑪)。2週間前、もう一人の友人ジャサがなくなりました。その悲しみも、ここで表明したいと思います (⑫)。主の招きにより、カブルは安らかに眠っているはずです。故人の遺志を、私たちはバトンを引き継がねばなりません。彼が残してくれたものは、単にともにいるだけではなく協力すること、一体となって、発展すること、平和を築くことです。私はここに改めて、私と私の家族を代表して、遺族の皆様へ追悼の意を表したいと思います。私たちは病により時を得ずしてこ

の世を去った友人の死に際し、ともに悲嘆の涙に暮れています。しかし、この別れは一時的なものであり、やがてまた会えることもわれわれはよく知っているのです。ご静聴ありがとうございました。

M・C [E]：…エティヤンさま、心あたたまるメッセージをどうもありがとうございました。

ただいまの弔辞は、イヨルワ技術訓練校のメンバーからのものです。

(3) 弔辞 **ヘンリー・オキニャル 教育省イヨルワ技術訓練校評議会 (Henry Okinyal)**

M・C [E]：…こちらには、技術訓練評議会の副評議員 (Assistant Commissioner) オキニャル (Okinyal) 氏がお見えです。皆様ご存じのように県農業試験場 (District Farm Institute) の校長を務めた後国立ブステマ (Busitema) 農業専門学校校長を歴任、教育省にお勤めです。オキニャルさま、こちらにお見えになり、ご挨拶をお願いいたします。

ヘンリー・オキニャル [E]：…ご紹介どうもありがとうございます。ご参列の皆さま、わたくしも聡明なカブル老とお別れを言わなければならないというこの悲しい事態において、言葉もございません。6か月ほど前でしょうか、イヨルワ技術訓練校の運営委員会議長オカダパウ氏とともにカブル老はわたくしを訪ねていらっしやいました (13)。カブル老は、その訓練校の出発についての、概要をお示し下さり、私どもは十分な議論を深めることができました (14)。彼はわたくしのことをいつも「ヤングボーイ」と呼んでいました。もうひとりの「ヤングボーイ」は元気かと尋ねるのが常でした。それがたいてい会って最初の一言でした。私の老父のこともカブル老は「ヤングボーイ」と呼んでいたのです (15)。いつもならば「元気です」と答えるのですが、今回は、もしいつも通りそう問われたならば、これから行って確認します、と言わなければいけません。というのも3日前にブイエンバ (Buyemba、地名) にいる彼はひどい脳マラリアで倒れ、私は昨日まで

そこで看病していたからです (16)。

カブル老はオカダパウ氏とともに私を訪れ、助力を求めました。私どもはこの国の教育を見渡して、考えたのでした。それが、私がカブルに会った最後になりました (17)。その前にもここには何度も訪れたことがあります (18)。ここで一時、時を過ごしたとき、彼は私を大いにもてなしてくれました。その話しぶりはあたかも実の父親であるかのようでした。本当の親であるかのようには、お会いするときはいつでも笑って送り出してくれたものです。「[ヤングボーイ]によろしく」それが彼の別れ際の常套句でした。私の父のことです (19)。老カブルが逝去されたのは誠につらい。私に訃報を伝えたのは、イヨルワ技術訓練校の校長でした (20)。昨日の朝のことです。私は彼に、文書にしてくださいと伝えました (21)。ここに私の気持ちもあらわされていると思います。彼の魂が永遠に安らかに眠ることを主にお祈りしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

M・C [E] : ...オキニャル様、ありがとうございました。これがイヨルワ技術訓練校のメッセージです。読ませていただきます。

弔辞 [E]

イヨルワ技術訓練校運営委員会副委員長オカダパウ・ジョセフ氏、委員会委員、そして、教職員と学生すべてを代表して、このたびの突然のオウオリ・カブル氏の死について、衷心より遺族、親族の方々にお見舞いを申し上げます。カブル氏は、イヨルワ技術訓練校の運営委員長をこれまで10年間つとめてこられました (22)。オウオリ・カブル氏は、学校の発展に尽力され、父として、友人として、主たるアドバイザーとして、イヨルワ技術学校の柱であったことをわたくしたちは忘れません。ご家族、そして本校が、まだまだ故人の力を必要としておりましたときに、道半ばにして彼を失ったことは残念でなりません。彼を失った損失を埋めることは困難です。全能の神よ、家族、親族にこの困難を乗り越えるすべを与えてくださいますように。そして、父よ、

故人の魂に永遠の安らぎを与えたまえ。

イヨルワ技術訓練校を代表して

イヨルワ技術訓練校 校長

【解説】

6にまとめた3つの弔辞はともに故人の晩年の活躍のなかでかわりを持った、仕事関係の関係者によるものである。

AIDS支援組織、TASOを総括する代表、コウティノ医師からの書面がM・Cによって読みあげられたのちに(②)、故人のTASOトロロ議長としての後任、ドーン・オブルが弔辞を読んだ(①)。カブルはオブルにとって妻のオジにあたる姻族でもある(⑥)。カブルは1989年TASOトロロが聖アントニー病院の病床二つ(1991年までに827床に拡大)を拠点に出発した折からの設立メンバーであり、最初の議長であった(③)。本来は、TASOからは(コウティノ医師をはじめ)直接代表を送り出すべきであるが、今回は事情によってかわらないことが述べられ(④)、TASO代表コウティノ医師も必ず後日弔問に来るだろうと予告された(⑤)。

続くエティアン氏の弔辞では、警察勤務の現役時代も、公職の汚職と厳しく戦い、再教育の問題にも真摯にとり組んでいたカブル(⑦)が、リタイヤ後とともに農家暮らしを楽しんでいた(⑧)としながら、故人の清廉潔白で偏見のない公明正大な性格が、どんな場面でも際立っていたと述べる(⑨)。また泣き言を言わないので、病気がここまで重かったことは知らず、結婚などの多忙を理由に(⑪)見舞いの約束を果たすことができなかったことを悔やむ(⑩)。また、2週間前の、カブルとも近しかったジャサの死にも改めて言及することで(⑫)、ユニオンの危機を印象づけるものとなっている。

最後のオキニャル氏の弔辞では、半年ほど前の故人とオカダバウ氏との最後の面会が(⑬、⑰)、技術訓練校の今後にとって非常に重要な意味をもつこと

を示唆される (14)。また、教育省の官僚と言え、押しも押されぬ中央官僚だが、その官僚がこの屋敷の当主 (故人) を父と擬して何度も訪れる間柄であるばかりでなく (18)、その当人ばかりか、父親まで「ヤングボーイ」と呼ぶエピソードの紹介は (15、19)、故人の貫禄を印象づけるものとなっている。もっともその父親がマラリアで病床に伏しているという事実は、病や死が誰にでも訪れるという真理を思い出させてくれる (16)。

訃報の出所も、技術訓練校という公式なものであったことと (20)、またお悔やみを文書として公のものにしたのだ (21) ということがあらためて紹介された。

校長の公式的な弔辞には、故人が訓練校の運営委員長を 10 年の長きに渡り務めてきたことが触れられている (22)。

7 弔辞 地方行政関係

(1) 弔辞 キザ・ジェームズ・ルウェベンベラ・アモーチ (Kizza James Rwebembera Amooti RDC)

M・C [E] :...続いて弁務官、弔辞をどうぞ。

キザ・ジェームズ・ルウェベンベラ・アモーチ [E] :...ありがとうございます。司会進行の方。アドラ閣下、奥様、そして大臣、県会議長、CAO、奥様方、そして子供たち、すべてカブルを知る方々へおくやみ申し上げます (1)。

人間というものは、生まれ、最後には必ず亡くなるものです。しかもそのことを知っています。ほかの動物とは、人間はここが違うと私は考えております。人間は、遅かれ早かれ死ぬことを知っており、だからこそ生きているうちにできることを力を尽くしてやろうと考えるのだと思うのです (2)。

私はカブルを個人的には存じ上げませんでした。この屋敷を訪ねるのもこれが初めてのことです (3)。しかしながら、私は彼がこの世で何を成し遂げたのか、よく存じています (4)。私は、彼のようなこの地域にとって有為の人物がなくなっ

たことを心から残念に思います。

アドラよ。そしてその臣民たちよ。人間が死んで泣くものではない²⁹、とイエスは説きましたが、あなた方には泣く理由が十分にあると思います (⑤)。経験がある年長者のほうがどうしてもうまく物事を進めることができ、年長者が亡くなって若者があとに残されると、しばらくの間はうまく進めるのに時間がかかるかもしれない。しかし神が導いてやがて残されたものの中でやり遂げることができるようになるにちがいないと信じたいと思います (⑥)。

心から故人の業績に感謝しましょう。とりわけ筆頭には TASO トロロの議長だったことを挙げさせていただきたいと思います (⑦)。TASO の議長として AIDS と戦った。彼にしてみれば、議長としての仕事がベストではないと思っていたかもしれないのですが (⑧)、彼が議長でいてくれたおかげで今日の TASO トロロの成し遂げた仕事があるというべきでしょう。

後継者が彼の意思をついで、彼のようにいい仕事を成し遂げてくれることを望んでいます。神よ、彼の魂に永遠の安らぎをあたえたまえ。

M・C [E] :...ありがとうございます。弁務官殿。すべてのクラン・リーダーは果物の樹の下に集まってください。キンテ氏、立ち上がって姿が見えるように。あの紳士がいるところが、クラン・リーダーたちの席です。また何か遺族にお見舞いの品をお持ちの場合もそこにお持ちください (⑨)。

さて、続いては、LC 5 議長に弔辞を讀んでいただき、その後、担当大臣その後はまたこの司会のほうへマイクを返していただくことにいたします。

(2) オウォラ・ノア (Owora Noah LC5 議長) [E] :...アドラ閣下。その奥方。そして労働と工業担当大臣閣下。尊敬すべきポール・エティヤンさま、そして参列者各位。

この儀式にこうして集まることは、実に寂しいことです。何かをお祝いするのではなく、故人を偲んで集まるのは。RDC が言ったように、私たちは、つい先だっ

て、ジャサを失いました (⑩)。彼は、アドラ人のなかでも傑出した人物でした。それからまだ1週間もたたないような気がしています。ここにまた、ニイレンジャ・クランの偉大な偉大なアドラ人である故人を悼んで集まらなければならないのは、悲しいことであり、何か誇らしいことというよりは、心配事の種になるようなことだと思えます。

ご参列者各位、私は本当に悲しいのです。本当ならば、故カブルの息子や娘の業績をお祝いしてここに集まることができていたら、どんなにいいことだったでしょう (⑪)。

私の記憶をさかのぼれる限りでいえば、私がカブルをはじめて知ったのは60年代のことでした (⑫)。当時彼は警察の (Senior Superintendent) 警視正、上級管理職であり、彼が残した教訓は、アドラの人、ひいては、県全体に貢献したことにかかわります。このことをアドラの人々は知らなければなりません。警察の職務にあつて、カブルは、彼を知る人の力になっただけではなく、広くトロロ出身者を助けたことを知るべきです (⑬)。

今日、トロロ出身のたくさんの警察官がおり、その一部は、かなり高い地位についています (⑭)。アドラ出身者も非常に多いのです。彼らが警察に入ったきっかけも、そして出世の糸口を作ったのも、すべてカブルでした。この教訓こそが、カブルが若い世代に残したものです。自分自身のために働くよりも、ほかの人のために働くことです。樹となり、それに実をつけることなのです。

今日、故カブルを見送るにあたり、ウガンダの様々な場所から、警察に入るとき、そしてその警察のなかでの出世においてカブルに大いに世話になったと思われる警察の高官が参列されています (⑮)。このことこそが、パドラにカブルが残した貢献なのです。本当に喜ばしいことで、拍手賞賛に値することはいうまでもありません。

カブル氏が引退したとき—人生とはひとつのプロセスであり、誰にでも違うタイミングでその時が訪れるだけなのですが—カブル氏にその時が訪れたとき、彼

は全く動じることなく、また、それを延長したいような希望をすることも全くなく、人生で初めて、新しく農業に挑戦するために土地を手に入れました (16)。それこそが、私たちが現在いるこの場所なのです。カブル氏について、ひとついえるとするならば、彼は何を實現したいのか非常に明確な人物で、またその成功への道筋を大変明確に意識していた方でした (17)。

カブル氏が農場を始めたころ、私たちの年代の者にとっては、彼は最初に輸入牛を扱いはじめた人物、として有名になっていました。私たちにあって輸入牛を見るのはそれが初めてでもありました。この地域では、明らかに挑戦的なことでもありました (18)。私共カンパラ、エンテベの高官は、自ら農場に出て汗をかくことを知りません (19)。カブルが与えてくれた教訓のひとつです。今では、輸入牛が私たちの子供たちのミルクや食肉として、子供たちをはぐくんでくれています (20)。これがいまひとつの、まさに称賛されるべき、故カブルの業績です。

レディース・アンド・ジェントルメン、これですべてではありません。カブルが行ったことのうち、私たちが享受していることは、まだまだあります。すべてではないにせよ、ずっと以前にここを訪れたことがある方が多くに違いありません。カブルは、ほとんど聖職者のような生活をしていました (21)。彼はキリスト教を大切にし、理性と良心の人でした。そのことを最初にここでオティティ医師が語ってくれたのは、喜ばしいことでした。カブル氏の命を奪ったのは、いわば自然の摂理であり、道徳的に不道徳な行いや人生で不適切な行いをを行った結果ではありません (22)。カブルは高貴に生まれ高貴な生を生き、そして一生懸命働いて、死後に全員に大きな教訓を残したと言っていると思います。

カブルの業績をたたえる唯一の道は、彼が自らを手本として開拓したその道を歩むことです。私はそう訴えたいと思いますが、今日は、説教めいた講演をするべき日ではありません。いまはただ、カブルが生前と同じ安寧を、死後の永遠の命のなかでたまわらんことを神に祈るだけです。

M・C [E]：...ありがとうございます。LC5 議長。続きまして、ジョセフ・オ

ポ大臣閣下に登壇していただきたいと思います。

8 弔辞 飛び入り

すでに見たとおり、RDCの客として中央政府から労働担当大臣がトロロ入りしていたので、急遽弔辞を頼んだものと思われる。

ジョセフ・オボ (Joseph Henry Obbo 労働担当大臣) [A] :...アドラ閣下、奥様、そしてその閣僚のお歴々、県の議長様、わたくしがここに参るためにお骨折りくださった友人各位に感謝します。また、ご参列のご遺族、ご友人各位には、追悼の儀にご協力いただきまして感謝いたします。

追悼の儀にご協力、と申し上げましたのは、二つの意味を持っています。ひとつは、カブル氏は私の出身の一族にとって、姻族にあたります。ここにいる子供たちは、私にとって姉妹の子供たちにあたりますし、故カブル氏は私の姻族なのです (23)。

それと、もうひとつ、カブルと私は、同じ言語アドラ語をしゃべります。だから、同胞としてご参列の御礼を申し上げたかったわけです (24)。

故カブル氏を知るようになったのは1960年代の初めでした (25)。はじめは、カンバラでのことだったでしょうか。オボという私の名前は、どうもパドラにしかないものようで、パドラ出身ということがすぐにわかったようです。そのこともあって、パドラから出てきた仲間たちに大いに支えられ、援助を受けておりました。なかでもカブルは、そういった民族を同じくする同胞に対する援助を無私に提供する方の一人であり、そのようなものばかりではないことはここにご列席の方々ご案内の通りです。情けは人のためならず、と申しますが、なかなか難しいことです。そのころ、出身者が集まって助け合っていた互助組織的な集まりで知り合うようになり (26)、カブル氏とのおつきあいは今日まで続いてきたわけです。カブル氏は、きわめて純粋な心の持ち主で、その言葉をたがえることがありません。私が氏を心から信頼するようになり、一緒に過ごすようになる

のにそれほど時間はかかりませんでした。そのような、何か問題が生じたら相談するような関係の信頼関係を築き、ともに過ごすようになるほどに信頼できる人に出会うことはめったにありません。それほど信頼に足る人もほとんどいないのです (27)。

だから 1998 年に私が選挙に出馬したとき、私はまっさきに彼に相談に来たのです。様々なところで苦戦している私の説明を聞き、戦略を授けてくれました (28)。その時がたぶんこの屋敷に来たはじめての機会だったと思いますが、そのあともたびたび参っていたはずなのに、ずいぶん時間がたってしまっていますから、本日はもうすこしで道に迷うところでした (29)。彼の妻は、私のクランから嫁したので、彼は私の姻族に当たります。姻族はときに面倒なものです、カブルとの関係は極めて良いものでした。姻族もあまりたちのよくないものは、嫁に手をあげたり、訪問しても姻族のことをよく言わなかったりするものですが (30)。

私を含むティエン・アドラの者にとり (31)、これは不幸なことといわねばなりません。お考えください。リーダーも、父親も、祖父もない屋敷、そのような屋敷でもめごとやいさかいが起こったとしても、誰もそれをおさめるための助言をしたりたしなめたりすることがないのです。もめごとは、当初はヒヨコのように小さなものだったとしても、やがてはトロロ・ロックの巨岩のように大きなものにもなるでしょう。とりまとめるものがいないからです (32)。このようなことを申し上げるのは、カブルがまさに、このパドラのリーダーだったからです。パドラにはほかにもリーダーはいますが、それを失うのはやはり痛手です。このことをことさら言うのは、最近同じようにもうひとり別なリーダーを失ったばかりだからでもあります (33)。

リーダーがいない屋敷の問題は、深刻です (34)。リーダーがいる屋敷の暮らしと比べてみればそれは明らかです。ふたつの屋敷の暮らしがいかに違うか、おわかりでしょう。ですから私は大変心配しています。そしてこの心配はみなさんも共有されていると確信しております。

私は彼の病気を知りませんでした。知っていたら見舞いに訪れたに違いないのですが (35)。実は、本日トロロに別の用事で参ってからのち、彼の死を知らされたのです。そのとき、体が震えました。まだ少し混乱しています。残念なことにトロロに来たのは、地域振興のための別の用事で、私はこれから一緒に来たこの人物と一緒に、トロロの各地を回らなければなりません。ですからこの後すぐに、午後2時までこの人物をしかるべき方に紹介した後に戻ってくるつもりです (36)。

ご列席の方々すべてに対し、そのさまざまな形での支援に改めて感謝申し上げます。またこの場をすでに離れた方がたの支援、支えに感謝申し上げます。いまはただ、彼の魂の安寧を神に祈りたいと思います。今、私たちにできるのは祈ることだけです。幸い、主教さまがおり、それ以外にも多くの宗教的な指導者がご列席です。そのことに感謝したいと思います。そして、この故人にやがては私たちも行くはずの、天国で再会することを望みたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

【解説】

7にまとめた二名と、8の「飛び入り」は、いずれも地方行政関係の弔問客である。RDC (Resident District Commissioner) は、大統領から任命され、中央政府から派遣される県のトップである。このRDCが中央政府の意向を伝え、LC側から選挙で選ばれたLC5議長やチーフと調整しながら地方行政は動いていくのである。

最初の話者、アモーティは中央から派遣されたので当然でもあるが、名前からしてアドラ人ではない。スピーチは英語であり、ユニオンの長である「アドラ」や遺族にも気は遣うものの、想定する聞き手は地方行政の関係者となる (1)。正直にカブルを個人的には知らず、この屋敷への訪問も初めてであると告白する (3) が、TASOトロロ議長職を筆頭に (7)、故人の業績はよく知ってい

るという (④)。また、聖書を引きながら、コミュニティの人々 (より直截には、アドラ・ユニオンを名指しで) に、聖書の教えに反して「泣く理由がある」とお悔やみを言い (⑤)、故人を失ったことで一時的な機能不全はありうるだろうが、やがて正常化するだろうことを説く (⑥)。TASO トロロ議長職を筆頭に挙げながら、やや躊躇した物言いになっているのは (⑧)、警察官としての華々しいキャリアも知ってるからだろうが、地方行政がらみということになると立場上、トロロにおける隠遁生活に入ってからのものをあげることになるのであろう。

続く LC5 議長、オウォラ・ノアは、LC で選挙で選ばれる、地方行政のトップである。地方行政には、議長のほかになかば世襲にちかいチーフがある。オウォラは名前から考えてもアドラ人。トロロ県はイテソの勢力とアドラ人の勢力が拮抗しており、しばしば分裂の議論になる。アドラや中央政府の閣僚に続けて、おそらくはイテソと見られるエティヤンの名前にわざわざ言及したのは、配慮の表れともみることができる。またうがった見方としては、オウォラはアドラ語ではなく英語でスピーチしていることも、選挙で選ばれたオウォラの、県の人口の多くを占め、参列者のうちの少なくない比率をしめるイテソへの配慮かもしれない。

本当は、故人の娘や息子の慶事で集まりたかったとしながら (⑪)、間接的に故人の死を惜しむ。60 年代に故人と知己を得たというオウォラは (⑫)、警察時代の故人の業績に言及する。しかも、知人だけでなく (暗にアドラだけでなく) トロロ県出身者が警察で出世することの助けになったと指摘している (⑬、⑭)。そのことが、当日警察の高官が数多く参列していることの原因であると説明する (⑮)。

また、リタイヤ後は、自ら農場で汗を掻くことを知らないという中央高官の一般的欠点をもたない故人は (⑯)、潔く身を引いて農業に専念したこと (⑰)、また、持ち前の目的意識を農業にも発揮したことを論じつつ (⑱)、実例として、

当時あまり手を出す人の少なかった輸入牛の導入に挑戦的な業績を残し (18)、またそれが今日の地域の食料供給に多大な貢献になっていることを強調している (20)。このことは、言及されていないが、アミン政権成立と同時に、カブルともオティティ医師とともに育てられた A・C・K・オボス＝オフンビの入閣との関係もあるだろう。オボス＝オフンビの妻エリザベスは、イスラエルで先進的な集団農業の研修を受け、その屋敷のあるニヤマロゴでも実験的な農場経営に乗り出していたことで知られている。事実カブルの屋敷には、オボス＝オフンビにプレゼントされたという、当時最新鋭のトラクターが何台か保管されており、これらのコネクションがカブルをして野心的な酪農経営に乗り出したであろうことは想像に難くない。

また、故人の宗教生活に触れ、キリスト教的理性と良心（英語では同じ reason）の人だったこと (21)、さらには、故人の死が、呪詛その他、故人の所業によるものではないことを明言し (22)、結果としては後にリエド儀礼の際に求められるいわゆる「死因」の合意形成に貢献しようとしているといえる。

続くジョセフ・オボ（労働担当大臣）は、RDCのもとを訪問していた客だが、アドラ人であり (24)、ティエン・アドラのメンバーでもある (31)。到着時に M・C にも紹介されたし、「UG145Y」という閣僚に配分されるナンバーの車を会場に乗り付けていることもあって、存在は参列者には、到着時より知られていた。オボの身分と故人との関係から考えて、最初に M・C が読んだ「式次第」には入っていないので、飛び入りで弔辞を頼んだものと思われる。この弔辞の後に公務を済ませ、またこの会葬場に戻ってくるという (36)。

オボには、カブルが病床にあることは知らされていないが、知っていたら見舞っていたはずの関係である (35)。故人とも姻族の関係があり (23)、しかも、故人とはきわめてよい姻族関係にあったことが強調されているからである (30)（このことはあらためてアドラの姻族関係が難しいことの証左となっている）。個人的には、オウオラと同じく、60年代カンバラでの警察官僚時代

のカブルの知己を得て (25)、出身者があつまる互助組織を通じた信頼関係を構築したとされる (26、27)。おそらく、当時の官僚であり、70年代からは国務大臣となったカブルの義兄弟分であるオボス=オフンビもまじえて交流したことであろう。すでに述べた OB 概念は、中央政府閣僚経験者などについても当てはまり、地方の少数民族なだけに、アドラ出身の閣僚、あるいは中央官僚同士は、特定の連帯意識を有していると考えて間違いない。

オボが1998年に選挙に出たときには、故人は参謀として戦略を授けてくれたと回想する。そのことで、この大臣が単なる任命による大臣ではなく、国会議員として選ばれた政治家であることを物語る。選挙対策でここを訪れたのがこの屋敷に来た始めだと当時を振り返り、その後も頻繁に足を運んだことも思わせるが (28)、「道に迷う」などいう比喻で故人の死も手伝って往時とは様子が異なっていることを暗示する (29)。

カブルというリーダーを失ったことの危機感をティエン・アドラと屋敷に対する危機として捉え (32、34)、ジャサの死とあわせて (33) 克服すべき状況であると説く。

スピーチはアドラ語。中央政府の閣僚は、イテソとアドラの確執にはさほどの配慮をしめていない。立場上、必要もないのであろう。

9 バイオグラフィ朗読

M・C [A]：...ご参列の皆さま、長時間にわたるご会葬まことに恐縮です。そろそろ、バイオグラフィをご紹介します、ティエン・アドラ、文化大臣、そして総理大臣、そしてティエン・アドラに登壇していただいたのちに、教会のほうにお返ししたいと思います。

...いま教会の方々がお着きになりましたので、まずは、ご起立してお迎えいただきますよう、お願いいたします。その後、進行を続けたいと思います。

[アドラ語から英語にスイッチ]

オメラ主教、ありがとうございます。閣下、そして主教様のご臨席がこの列席の方々のスピーチが終わる前になつたことは、大変重要なことでした。

故人の生前の事績を私たちであらためて確認するために、バイオグラフィは、儀式のもっとも大切な部分です。アドラ閣下には最後にスピーチしていただこうと思います。ご参集のみなさんにとり、アドラの子供のひとりである故人に対してどのようなお言葉を賜るのかその言葉に耳を傾けることは、此度の参列をより意義あるものとするでしょう。

時間をあまり無駄にする前に、まずバイオグラフィを読ませていただき、その後閣下を改めて登壇いただきます。そしてその後、すべてを教会のほうに引き継ぎたいと思いますが、それほど長くはかからないと思われま

…彼は、ウガンダにおいてOレベルに合格しました。1960年に公共政策と社会科学のディプロマを取得(①)。国際法の資格を取得し、1960年に官僚に登用されました(②)。1961年にロンドン、西ライディング、ウィグフィールドの刑事捜査訓練に参加しました。1962年にはロンドン、ラムシールドの上級警察コースを修了し、警部に昇格しました。1963年には、ロンドン、ヘンドンでの司令官コースを修了し、1963年にはさらにスコットランドヤードでのスペシャル・ブランチ上級コースをとりました。1964年にはロンドン警察の警察管理者特別コースをおえました(③)。1965年から1969年までカンバラのスペシャル・ブランチ司令部に勤務し、1966年には、カラモジャの外部地域司令官(警察)に任命されました。1970年には、ナグルの警察学校の県警察司令官コースをおさめ、1970年から1975年までは、ウガンダ・ジュート・バッグ(麻袋)の代表でした(④)。1971年に「悪魔」によって退職しました。私はこれを故人の書いたまま読んでいます(⑤)。

1973年から1981年まで、ウガンダ乳製品組合の代表に任命されておりました(⑥)。1979年にウガンダ警察に復職し、ムバレの地域警察指令官とし

て務めました。その職も1982年に停年で退職いたしました(⑦)。ウガンダ酪農家組合トロロ支部の会長に選任されました。そのほか、アシンゲ酪農協同組合、ニレンジャ多目的協同組合の議長を務め、キソコ女子小学校のPTA議長、キソコ男子小学校のPTA会員も務めておられます(⑧)。今日までニレンジャ・クランのクラン・ヘッドをおつとめです(⑨)。1984年には、ウガンダ畜産業株式会社協議会の会長に選任され(⑩)、1993年2月25日には、イヨルワ技術訓練校の運営協議会議長に任命されています(⑪)。また、TASOトロロは1998年はじめに停年で退いていますが、カンバラのTASO中央執行委員会の委員であり続けておりました(⑫)。トロロ警察／刑務官退任者組合の議長もつとめ(⑬)、10月31日には、ティエン・アドラの内部クラン関係調整秘書官に任命されておりました(⑭) …。

これがわれわれの眼前に横たわる、今日我ががともに見送る兄弟の生涯でした。…こんなに多くのことがバイオグラフィで読まれることは稀でしょうが、すべては事実です。われわれティエン(ユニオン)がこのような人物を失ったことは大変な痛手だと言うべきでしょう。このような重要な人が世を去ったあとも、残された私たちは力を合わせていかなければならない。私たちは神との約束を果たさなければなりません。

【解説】

バイオグラフィは、故人が病床でまとめたものとされている(⑤)。バイオグラフィの要点としては、1960年(独立は1962年であるから、保護領時代。後に言及されるように当時の学位は一般に素性がいいと考えられている)にディプロマ取得(①)。生前のインタビューによれば、キングズ・コレッジ、ブドでS4を終えたころ、リクルートのために学校に訪問してきた警察に応募したという。生年が1927年であるところからすると、いったん警察に勤務し、

その後学位を取得したものであろう。ディプロマ取得とほぼ同時に官僚となっている(②)。このころの官僚や閣僚などのバイオグラフィを見るとわかるのだが、学位や資格試験が職階の上昇に直結していることがわかる。同様に、スコットランドヤードやロンドン警察の研修を受けて管理職に就く(③)。これらの派遣については *Uganda Gazette* にうらづけの資料が記載されている³⁰。クーデターのあと、警察などの公職からは1971年に「悪魔」によって離れることを余儀なくされた(⑤)。「悪魔」とは、のちに義兄弟オボス=オフンビを殺害することになるイディ・アミン大統領のことである。アミン政権が崩壊するとその年に公職に戻り、ムバレの警察で停年まで勤務している。(1979-1982)(⑦)。その後トロコ警察/刑務官退任者組合の議長(⑬)。

公職を離れたあとには、ウガンダ・ジュート・バッグ代表(1970-1975)やウガンダ乳製品組合(1973-1981)(⑥)などを歴任、弔辞で触れられたような、農業の生活にいそしんでいたわけである。ウガンダ畜産業株式会社協議会の会長(⑩)、イヨルワ技術訓練校の運営協議会議長(⑪)TASO中央執行委員会の委員(⑫)などを務め、畜産関係以外からは、それぞれ関係者からの弔辞が寄せられている。

地域のための活動としては、酪農協同組合のほか、ニイレンジャ・クランの協同組合、キソコ男子小学校、女子小学校のPTAを長く務めた(⑧)。

ティエン・アドラでは、内部クラン関係調整秘書官(⑭)であるとともに、ニイレンジャ・クランのクラン・ヘッド(⑨)であった。改めてバイオグラフィを検討すると、それぞれの業績に合わせてバランスよく弔辞が読まれていることもよくわかるであろう。また、このバイオグラフィを、このあと弔辞を読む「アドラ」であるモーゼス・オウォリ隣席のもとで読むことにスケジュール調整の要諦があったことも、注意すべきことのひとつであろう。

10 弔辞 アドラ・ユニオン関係

(1) オティエノ・テフロ (Othieno Tephro 文化大臣)

M・C [E]：…残りも少なくなってきましたが、続いては、文化大臣、総理大臣代行をお呼び出しして、最後にアドラ閣下をお呼び出ししていただきますよう。

オティエノ・テフロ [E]：…司会に言及されましたように、私に課された仕事はごく単純なものです。つまり、そのちにお言葉を賜るはずのアドラ閣下を招き入れるべき首相をお呼び出すことなのです (①)。

私がここで話しすべきことは、すべて先に登壇した方から紹介されているように思われます。それを繰り返すのは、意味のあることとも思えません。それとは別の、彼がいかによい人であるか、といったことは、宗教的な場所で雄弁に語られることでありましょう。私の前にお話しになった方が話さなかったことで、私がここで話した方がいいと考えますことは、チャールズ・エドワードというクリスチャン・ネームを彼が名乗っていたと言うことは、彼は、洗礼を受けた、という事実を物語っています (②)。彼は今、すべての悪いことを手放してこの世に残し、失うべくもないよいことだけをもって天に召されたのです。故人は、俗的なことを好みませんでした。これは永遠の命につながることです。彼の命は、彼の望み通り、天に永遠の安寧のうちにあります。

名誉ある総理大臣閣下、まことに恐縮ですが、こちらに足をお運びになり、アドラ閣下を呼んではいただけないでしょうか。ご静聴に感謝します。

(2) オボ・ケネス・マコラ (Obbo Keneth Makola 総理大臣) [E]：…アドラ閣下、ご参列の執事、そして教会関係の指導者、さらに大臣閣僚、国会議員の方々、

県の長または、ご弔問の皆様、紳士淑女の皆様。

アドラの子供のなかでも非常に特筆すべき人物のひとりを見送らなければならないのは大変悲しいことです。故人は私の、義理の兄弟に当たりますので、まことに言葉もございません (③)。しかも、最後の義理の兄弟でありました (④)。ほかの兄弟は皆他界しておりますので、最後の、まことに誇らしい、義理の兄弟

でありました。しかし、勇気を出して、聖書にあるように、彼は、現在ここに横たわっているのは一時的なことで、父のもとに召されるのだと、それは彼にとってもよいことなのだ、つよい気持ちで涙をぬぐう必要があるのだろうと思います。

これまで登壇された方々が口をそろえて、故人はこの国のなかで極めて傑出した人物だ、と繰り返してきました。彼は公僕としてよく働き、その多様な業績の記録はいたるところに残されています。ニイレンジャ・クランの、クラン・ヘッドとしても知られ (⑤)、また、同時にオウォリは、ティエン・アドラの閣僚としても務めていたのです (⑥)。彼は、私たちが先ごろすでに埋葬した故ジャサに代わって、副議長の代行の要職を務めていました (⑦)。ここで私は、これ以上多くを語るよりも、アドラ閣下にご登壇いただき、家族、ティエン・アドラ、そして多くの人々に代わってお言葉を賜りたいと思います。アドラ閣下、あなたの臣民のためにご挨拶ください。ご清聴ありがとうございます。

(3) モーゼス・オウォリ (Moses Oworい ティエン・アドラ) [A] : ...執事さま、教会の方々の面々の前でお騒がせすること、お許してください。私たちは臣民に会ったとき、彼らを迎える、また挨拶するひとつのやり方があります。そのやり方での挨拶を今ここですることをお許してください。

…「アドラの孫たちよ、どこにいるのだ？」(Nyikwayi Adhola, wini kune?)

「われわれはここだ」(Wani ka!) (臣民は答える)

よく聞こえないのでもっと大きな声で聞こえるように答えてもらいたい。

「アドラの孫たちよ、どこにいるのだ？」(Nyikwayi Adhola! Wini kune?!)

「われわれはここだ」(Wani Kaa!!)

「カブルを埋葬に来たのか？」

「そうだ！」

今度は、聞こえました (⑧)。

…執事様、教会の指導者たちよ、名誉ある大臣ヘンリー・オボ、県の議長、弁務官、夫を亡くした寡婦よ、父親を亡くした孤児よ、そして参列者各位、誰一人として私は除外すまい。しかしながら、わたくしほどカブルを失ったことを大いに悲しんでいるものはいない、とあえていおう。というのも、参列者各位を見渡しても、私ほど長らく彼と友情をはぐくんだものがいようとは、一見したところ思われなからです (⑨)。今日埋葬しようとするカブルと私との友情は、65年に及びます (⑩)。1937年、まだ幼い私は、そのころムランダのカウンティ・チーフだった叔父のところに寄宿して初等学校1年に通い始めました。ちょうどカブルも初等学校1年でした。私はカトリックの学校で、カブルはプロテスタントの学校でした。しかし私たちはいい友人でした。カトリックの学校に私が通う際に一緒に来たり、翌日は私が彼のプロテスタントの学校に行ったりしました。その際にお互いにエスコートしたのでした (⑪)。学校の教師たちも不思議そうに私たちを噂していました。ある日いたかと思ったら、次の日はいない。シワの学校でのことでした。正規の学生なのかどうか、教師たちはいぶかしんでいたようです (⑫)。

1938年に叔父がモロ・サブカウンティのチーフに配置換えになり、私とカブルとは別れることになりました。それから1947年にナミリャンゴ・コレッジに入るまで別なところで学びました。そのころカブルはすでに警察に入っていて、私を探し当てて、会いに来てくれました (⑬)。休暇の時はよく彼の家で過ごしました。彼は私に銃の面白さを教えてくれました。私が銃に魅せられ陸軍の訓練を受けるようになったのは彼の影響です。その後、ジンジャで軍人の訓練を受けるようになったのも彼の影響でした (⑭)。私たちの関係は続き、私がイギリスに留学した時には、すでに英国にいたカブルは、それを聞きつけて多くの友人を紹介してくれ、おかげで私は、イギリスについたときはすでにストレンジャーではありませんでした。カブルの友人は私の留学中も親切に援助してくれて、私は無事留学生生活を

終えることができました (15)。

そればかりではありません。1980年に政府を引退した私が国連に務めるようになり、家を留守にして国外に暮らすようになったとき、家の管理をしてくれて何であれ家に起こったことは事細かに知らせてくれたのも、カブルその人でした (16)。それで話は終わりません。

そのようなわけでしたから、私たちがアドラ・ユニオンをつくって、先に紹介されたように、暫定政府の副議長代行として、私はアドラの座についてから、すべてのクランの統率をカブルに任せました (17)。彼はその時からまるで辞書のようにならぬ仕事に邁進しました。パドラを統べるにあたり、何か考えたり、理解の及ばないところがあるとカブルのところを訪れるか、逆に彼が私のところにきて考えを知らせてくれるのが常でした (18)。

改めて申し上げますが、ご参列の多くの方々の誰よりも、私はカブルを失った損失を身に染みて感じております。カブルを失った損失が何か、すでにたくさんのご指摘されましたから、ここでは改めて付け加えません。一つのことを除いては。私が申し上げたいのは、カブルはこの国を発展させた重要人物であるということ、そしてこの屋敷の遺族、子供たちのことは、私たちが心配しなければならないということです (19)。この屋敷は大きく、重要な屋敷です。大臣ヘンリー・オボが申しあげたとおりです。ここに遠くから参列された方も近所の方にも申し上げますが、この屋敷は、権威ある屋敷です。しかし、この屋敷を去った子供たちよ、カブルの兄弟よ、ニイレンジャの人々よ、あなた方はこの屋敷に何をしようとしているのか。これは重大な問題です (20)。カブルは彼の役割を果たしました。それは見る事ができるでしょう。しかし、残された我々は何をしたというのでしょうか？私がおここに参ったとき、この屋敷は壊れかけて、しかも問題が起こっていたのは口惜しいことです (21)。去ったものや、しかしながらこの屋敷の重要性をよく理解して、問題解決をニイレンジャ・クランの方々には求めたいものです (22)。その問題解決なしには、ニイレンジャの方々には私の宮殿にきてほしくありません。

んし、私たちの友情も問題解決まではお預けです (23)。ニイレンジャの方以外に申し上げます (24)。私の友人の埋葬にご参列いただきありがとうございます。

【解説】

10としてまとめたのはティエン・アドラ関係の弔辞である。非常に回りくどいことであるが、アドラの「王」たる「アドラ」、モーゼス・オウオリに弔辞を読んでもらう以前に二つのステップが踏まれている。第一に、最初のスピーカー、オティエノ・テフロを呼び、ティエン・アドラの首相、オボ・ケネス・マコラを呼び出してもらい、第二に首相によって「アドラ」を紹介してもらうのである。このもったいつけた、と言いたいような迂遠な手続きは、王国の儀礼を模したもののようで、ブガンダ王国でもほぼ同じ手続きが取られるという。基本的に文化的な行事には文化相が同行しているが、カティキロ (*katikiro* = 首相) 臨席している場合には、礼儀上カティキロに、カバカ (*kabaka* = 王) を呼んでもらうのだという。

したがって、最初のスピーカーであるオティエノ・テフロは、自らの役割を「アドラを招き入れるべき首相を呼び出すこと」(1)に限定しているし、論点もカブルがクリスチャン・ネームを持っていることから、キリスト者であることを強調するにとどめている (2)。

続く首相のオボ・ケネス・マコラは、カブルが、自分にとって最後に残った義理の兄弟であること (3、4) に言及し、ニイレンジャ・クランのクラン・ヘッドであることと (5)、ティエン・アドラの閣僚であること、ジャサの死後は副議長代行を務めていること (6、7) にのみ触れて、「アドラ」であるモーゼス・オウオリを招き入れている。また、「アドラ」を「王」に見立て、その聴衆に多く含まれるアドラ人を「臣民」と呼ぶなど、本来のアドラ社会にはなかった、王国に見立てた組織を思わせる用語法が目される。

首相に乞われ、レガリアを身に付けて登場した「アドラ」、モーゼス・オウオ

りは、(私自身はこの挨拶はこの場で見たのが最初で最後だが)、臣民と問答する挨拶を恒例としている(⑧)。これは大変新しい慣習で、ブガンダに類似のものがあるかどうかは現在調査中である。双方とも叫び声をあげるもので、大変騒々しいことは確かであり、それを行う前に教会関係者への配慮を述べている(なかには苦々しい顔を見せる参列者も皆無とはいえなかった)。

自分で述べるように、小学校1年からプロテスタントとカトリックの双方の学校を行ったりきたりしていたという(⑪)、実に65年にも及ぶ(⑩)モーゼス・オウォリとカブルとの交友関係の長さ(⑨)は別格だった。しかも、ここで深入りする余地はないが、パドラはカトリックとプロテスタントの布教競争と地方行政職のポスト争いとが複雑に絡み合って、非常に根深い対立構造があり、お互いが正規の学生かどうかいぶかしんだような状況(⑫)で交流することには大きなリスクが伴ったことが想像される。逆にいうと、そうした根深い対立構造をやすやすと乗り越えるような友情があった、という演出だったとすれば、これはきわめて効果的に働いているといっていいただろう。

1938年に寄宿先の叔父の配置換えによるモーゼスの転校で一度は分かれたふたりだが、1947年にすでに警察勤務のカブルが大学生のモーゼス・オウォリを探し当て、尋ねてくれたことで(⑬)、更なる友情を育むことになる。おそらくは聴衆にとっても驚くべきことだが、モーゼス・オウォリのキャリアを特徴づけ、さらには、「アドラ」に選ばれる際のポイントになったいくつかの点、つまり軍事訓練の経験があり軍事に明るいことも(⑭)、その後の国際的な活躍につながる英国への留学も(⑮)、大いに故人によっているというのである。しかもモーゼス・オウォリの1980年からの海外生活に当たっての留守中には自宅の管理まで買って出たという。それもきわめてきめこまかいものであったことがうかがわれる(⑯)。

また、選挙の折には、同じく候補だったカブルがモーゼス・オウォリ支持をあらかじめ表明しており、次点のジャサが首相兼副議長となったが、亡くなっ

たために、カブルが副議長代行となった。事実上、ティエン・アドラの統率を任されたわけである(17)。アドラのような寄せ集め社会で、急ごしらえの「王国」が、それぞれの文化もかなり異なっている53ものクランを取りまとめるのには、大変な労力が必要とされると容易に想像されるが、お互い密に相談しあって進めていたようである(18)。

最後に、故人の偉業をたたえるものの、懸案事項としてこの屋敷の荒廃について心配事を口にする(19、21、22)。「問題が解決しなければ、私の宮殿に来るな」「友情はお預けだ」(23)、とか、「ニイレンジャ以外の方々、ご参列ありがとうございます」(24)などは、もはや弔辞というより厳しい警告であり、あたかもニイレンジャ・クランの人々が故人の遺産を狙っているかのような告発であるともとれる(20、22)。詳細はここでは扱わないが、一般に知られるところでは、故人には正式な結婚をせずに事実上の妻が二人、さらには数多くの非公式な女性がおり、彼女たちとの間にも多くの子供たちがいたといわれる。カブルの遺族のうちで、相続をめぐる問題が起こっていたことは容易に推察される。

11 教会のサーヴィス

オメラ主教 (Bishop Omella) [ガンダ語による 以下 G] : ...主はあなたとともにありますよう、また、聖霊とともにあれ。

ご起立願います。ルガンダ聖歌番号 77 番。

聖歌 77

私は復活であり、命である。私を受け入れるものは、死者でもよみがえるであろう。生きているもので私を受け入れるものは、その命が永遠に続くであろう。私は私の贖い主がこの世に生きていたのを知っています。そして、その皮である肉体は滅びようとも、私の血肉は、主に対面するであろうことを疑いません。私たちは死後の世界に何ももっていくことができません。神の名だけを、誇りとし

て持ち続けることができるのです。

「詩編 90」を読みましょう。

…90:1 [祈り。神の人モーセの詩。] 主よ、あなたは代々にわたしたちの宿る
ところ。

90:2 山々が生まれる前から／大地が、人の世が、生み出される前から／世々
とこしえに、あなたは神。

90:3 あなたは人を塵に返し／「人の子よ、帰れ」と仰せになります。

90:4 千年といえども御目には／昨日が今日へと移る夜の一時にすぎませ
ん。

90:5 あなたは眠りの中に人を漂わせ／朝が来れば、人は草のように移ろい
ます。

90:6 朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい／夕べにはしおれ、枯れて行き
ます。

90:7 あなたの怒りにわたしたちは絶え入り／あなたの憤りに恐れます。

90:8 あなたはわたしたちの罪を御前に／隠れた罪を御顔の光の中に置かれ
ます。

90:9 わたしたちの生涯は御怒りに消え去り／人生はため息のように消えう
せます。

90:10 人生の年月は七十年程のもので。健やかな人が八十年を数えても
／得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは
飛び去ります。

90:11 御怒りの力を誰が知りえましょうか。あなたを畏れ敬うにつれて／
あなたの憤りをも知ることでしょう。

90:12 生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得る
ことができますように。

90:13 主よ、帰って来てください。いつまで捨てておかれるのですか。あなたの僕らを力づけてください。

90:14 朝にはあなたの慈しみに満ち足らせ／生涯、喜び歌い、喜び祝わせてください。

90:15 あなたがわたしたちを苦しめられた日々と／苦難に遭わされた年月を思っ／わたしたちに喜びを返してください。

90:16 あなたの僕らが御業を仰ぎ／子らもあなたの威光を仰ぐことができますように。

90:17 わたしたちの神、主の喜びが／わたしたちの上にありますように。わたしたちの手の働きを／わたしたちのために確かなものとし／わたしたちの手の働きを／どうか確かなものにして下さい…⁽³⁾。

はじまりであり、また永遠でもある、栄光なる父と子と聖霊とのみ名によりて、アーメン。

ご着席ください。

聖書の「テサロニケ人への手紙」第4章。聖パウロの手紙、13節。

…兄弟たち、既に眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してください。主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残るわたしたちが、眠りについた人たちより先になることは、決してありません。すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている

者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。ですから、今述べた言葉によって励まし合いなさい…³²

これが主のおことばです。神に感謝。

この機会に、参列者のうち、十字架を頂く神に仕える方々を紹介いたします。皆さまご着席のまま、教会の指導者の方だけ立ち上がって、どこにいらっしゃるかわかるようにお姿をお見せください。元大執事と現大執事のお二人、まずはお立ち上がりください。私も含めまして、ブケディ管区の司祭たち、立ち上がってください。ご参列に感謝いたします。カリスマ派教会のレヴランドたち、由緒ある大執事の方々、起立願います。われわれの私の兄弟マイケル・オウィノとその妻も、紹介させてください。ようこそいらっしゃいました。私の兄弟、レヴランド、神父もここにいらっしゃいます。ヴァリヴィアン・オケチヨ (Valivian Okecho)、ようこそいらっしゃいました。つづきまして、ペンテコスタ教会の主教さまたち、ここにいらっしゃいます。そしてなによりも、兄弟、姉妹たちよ、私たちの母である、アイダ・オキレ (Aidah Okile) もこちらにいらっしゃいます。この機会をとらえて、管区の厳しいスケジュールのなか、ご参列いただいた主教様に感謝申し上げます。このために彼はすでにあった予定をキャンセルしてご列席くださいました。お祈りいたします。主教様。お言葉を賜りますようよろしくお願いいたします。ご存じない方のために、ご紹介いたします。この方が私共の主教様で、レヴランド・ニコデマス・エングワラス・オキレ博士です。ときどき単に私たちはブケディと呼んでいますが、ようこそお運びくださいました (①)。

さあ、ガンダ語聖歌の 267 番を、歌いましょう。神はあなたの近くに。

オキレ主教 (Bishop Rev. Canon Necodemus Engwalus Okile) [G] : ...私の唇

から出る言葉、私の心から出る考えが、あなたの御心にかないますようにお導きください。私を強く導いてください。贖ってください。アーメン。

私には、残された妻と、亡きチャールズの子供たちに立ち上がることを促し、皆さんに紹介することが求められております (②)。

神の人々よ。ふたたび再び私が述べるのは、生命のことにほかなりません。特定の誰かの死がほかの誰かにとっていかなる意味があるのかは、本当のところわかりません。誰か死んだあとにも、生きている人は、日々の暮らしをまた紡いでいかなないといけないのですから。私たちが戦わなければならないもっとも究極の敵は、死ではありません。最大の敵は、罪です (③)。死は最大の敵ではないどころか、死はむしろ死こそが過去の罪を終わりにしてくれるからであり、それがなければ、生には究極の敵である過去の罪が付きまとったままだからなのです。聖パウロを引いてこの朝説かれた通りです (Saint Paul's Letter to the 1st Thessalonians 4:13ff)。これは、非常に考えの深かった、聖パウロのものです。故チャールズ・カブルのような方は、このような考え方を共有していました。

私は、カブルが生前何を成し遂げたか、皆様が語るのに注意深く耳を傾けておりました。カブルは学究の人で、外交のひとでした。といっても今のようなものと考えるべきではありません。昔ながらの正統な、いやどのような時代にも比肩することのない、優れた外交手腕を発揮しました。当時カブルの答案の採点をしていたのは白人ですから、賄賂が通じるわけありません。最近では卒業資格を得るのにお金にものを言わせてニセモノの学位を持っている人もいますが、そういうものではありませんでした。その時代の人々は苦勞したものです (④)。今話題のセバガラ (Sebaggala) ⁸³ だってロンドンでは苦勞したのかもしれませんが、しかし、故人の業績は本物です。セバガラのものとは違います。セバガラは警察にマークされていて 2006 年の大統領選に出馬できるとはとても思えません (⑤)。

カブルは学校に行くように言われず、自分の分をおのずから知り、自分の進路を選びました。法を知り、それにのっとって生きる人は、素晴らしい (⑥)。ほめ

たえたいと思います。彼が残した業績が際立ったものであることは、この埋葬の場で皆さんが目撃したり聞いたりしている通りです。

さて、再びまた今日の午後に聞かれた聖パウロの手紙から引用したいと思いません (⑦)。この聖書の小見出しには、主が来た、とあり、その4章13節において、パウロは、死後に死者の真実についてしりたがる私たちの兄弟に向かい、言葉を選びながら次のように述べます。

まず、はじめに、知ってもらいたい、と話し始めます。この国そしてほかの国々、ひいては人間をもむしばんでいる問題は、知ることができず、事実を語るができないことです。

知るという行いは、選択的なものです。あなたがさまざまなものから何を選び出し、重視するのかを試すこととなります (⑧)。

私たちの現在の問題は、ラジオ番組の「カトウェ」が度を越しており、誰の歯止めもきかないことです。本当のニュースはなく、路上で得るゴシップと大差ないものしか放送されていません。また視聴者も、半分、悪くすると4分の1が本当つまり4分の3が嘘というような放送に人気が出たりします (⑨)。

聖パウロが、死んだ者についての真実について知るべきだと説いたとき、私たちの関心を死の真実に向けるべきだと論じたのです。それでは、死の真実とは何でしょうか (⑩)。

死の真実を語る時、私たちの愛すべきカブル・チャールズの死を例にとって、考えてみましょう。カブルは、医学的にはなくなって、やがてチリやほこり、灰と同様、土にかえる宿命です (⑪)。

しかし、その家族にとってはどうでしょうか。ジェシカと子供たちにとっては。このことは、夫の死であり、父の死であり、そして、祖父の死である、また、友の死であり、親族の死であり仕事仲間の死であると考えます。それぞれのかかわり方により、受け止め方も異なるのです。このことは、故カブルが、彼を知っていた人々のコミュニティと別れること、彼の妻と別れること、そして友と別れる

ことを意味します。そしてその遺産のもとに育てられ、ジェシカとともに育てあげた子供たちの記憶とも別れることです (12)。

我々は、友人として、故人をそれほど知っていると言い立てることはできませんが、今別れようとしている故人が我々のために果たしてくれた大きな役割についてはよく知っているつもりです。遺族である、ジェシカ、子供たちの、耐え難い心の奥の悲しみもいくらかは察することができるつもりでおります。この悲しみがわかる者は、また彼らの鼓動の音を聞くものは、そこに込められた、不安の気持ちも聞き逃すことがないでしょう (13)。

死は遺族に対しては、悲劇を持ってきてそこに置いていきます。家族が抱くべき悲劇は、もういっぱいいっぱい抱えきれないほどです。一方、私たちはここへ集い、首を振って無念の情を表し、悔やみの言葉を言っておしまいです。帰ったらまた関係ない日常が始まります (14)。これが死の真実ではないでしょうか。死はあとにこれらのことを残すのです。しかし、私たちは偉大な男も女も、次から次へと死んでゆくことを知っています。

このことは、伝統的リーダーとしてのアドラ閣下と私が、皆さんに共通の規範として共有されている哲学を使って述べようとしていることと同じことを言おうとしている、と考えることもできます。アドラは「あなた方はどこにいる？」と問いかけるとみなさんはみな「私たちはここにいる」と答えました。しかし、皆さんは問題を抱えているのです。これからどうするかが問われているのです。このことが、全アドラ人に向けてされた、アドラ閣下のお話の核心だったではないですか。みなさんが「私たちはここにいる」というとき、それは、いまここにカブルの死が残していった問題を解決するということを確認することだと思います。または、ジェシカと子供たち、遺族の悲しみと嘆きを取り除き、癒すことを宣言しているのです。みなさんが「ここにいる」というとき、この場の人間であれば誰でも訪れる死という状況による希望のなさ、暗さ、そういうものを取り除くのだ、といった気持ちでいてもらいたいと思います (15)。

私の第二のポイントは、聖パウロは、喪に服すときに、悲しみをもって喪に服すべきではない、ということをお教えていました。こうすることによって、当の遺族の悲しみを推察する能力に障害ができ、大切な人を失った人たちの側の立場に立ってあげることができなくなります。だから各々の孤立や、別離は、ここでは強調されてはなりません (16)。

私が最も言いたいことは、ニイレンジャ・クランの人々、そしてクラン自体に対する警告です。今日ことが起こったことを知り、明日には、これ幸いと故人の財産を奪いにくる欲望にかられるものがあるかもしれません。たとえば、大きな鍋をもってどこかに逃げ去るものがあるかもしれない。未亡人と残された者たちへのルーティング³⁴は、皆が黙認してアドラの文化が許すとしても教会は許しません (17)。

最後に私のスピーチを希望の言葉でしめくりたいと思います。聖パウロ自身の言葉です。イエス・キリストを信じて死んだ者は、最初によみがえる。このことは、私たちに安堵を与えてくれます。というのも、なくなったチャールズは、極めて主に忠実な信仰を抱いていたからです。もっと前に亡くなったほかの信仰心厚い人々同様、彼ももっとも先によみがえるでしょう。チャールズは、イエス・キリストを信じて生きました。そしてまたよみがえるでしょう。イエス・キリストは、彼を信じるもののために生き、死んでもよみがえったように。私はチャールズがイエスとともによみがえると信じます (18)。

神よこの言葉に祝福を与えてください。言葉聞き入れてください。神がチャールズに永遠の命をお与えになりますように。

ご起立ください。信仰告白。

アーメン。私は、天にまします父なる万能の創造主、神を信じます。処女マリアに聖霊のために宿せられたその子イエス・キリストを信じます。ポンティウス・ピラトによって責め拔かれ、磔の刑に処され、埋葬されて地獄に送られましたが、三

日目によみがえって天に昇られました。イエスは、万能の神の御坐の右手におられ、生きた者死んだ者の審判に降りて来られます。私は聖なる教会を信じ、聖霊との共食を信じます。また、復活の日の罪の許しが永遠に続くことを信じます⁸⁵。

人間として生まれた者は、その短い生涯の間に実に様々な問題があるのです。

M・C [A]：…棺を運ぶことになっている方々は、運び始めてください。最後の表敬をする方は墓穴のほうにお集まりください。それがおすみになりましても、慌ててお帰りにならないでください。お水をいくらか用意してごいます。家族とニイレンジャを代表して改めましてご参列の方々に厚く御礼申し上げます…。

【解説】

M・C がしばしば教会に儀式を「引き渡す」(hand over) という言い方をするように、この 11 にあたる部分は教会主導で行われた。ウガンダ教会 (Church of Uganda) の儀式は基本的にはガンダ語である。

「聖歌 77」が歌われるが、すべての儀式がガンダ語で行われるプロテスタント教会系の信者、あるいはガンダ人しか歌えない。

続いて、葬儀では一般的な「詩編 90」が読まれ、続いて「テサロニケ人への手紙」が読まれる。これは、聖パウロが布教先のテサロニケの人々に、死んだあと人がどうなるのか、という関心にこたえて書いたものとされる。

続いて各種の教会関係者が紹介される。なかでも最後に儀式を締めるブケディ主教のオキレを紹介することに眼目が置かれている (①)。

続いてオキレ主教の説教。このなかで、故人が残した遺族を参列者たちに紹介するのがもっとも大きな役割のひとつである (②)。この部分は、一般の葬儀でももっとも大切な部分のひとつで、説教のなかでしばしば、遺族の教育 (ときに養育) に参列者たちのコミュニティの協力が必要だ、と訴えられる。オキレ主教の説教のなかでは、「死」を「敵」というより最大の敵である「罪」を

も無化してくれるものであると位置づける (③)。さらにバイオグラフィや甲辞を受けて、カプルを「学究の人」と位置づけ、経歴を作り上げることでも有名な昨今の政治家、とくに時事的にホットなセバガラなどと対比して (⑤)、独立前に取得した学位の素性のよさを強調する (④)。また、カプルが主体的に職業を選択したことに触れ (⑥)、それを高く評価する (逆にいうと、故人のがディプロマにとどまり、この社会では極めて高く評価されており、多くのコロニアル／ポストコロニアル・エリートがもっているマスターやドクターを持っていないことに対する弁護にもなっている。)

さらに、聖パウロの手紙第4章13節に戻り (⑦)、「知る」ことが非常に選択的な営為であること (⑧)、しかも正しく知るためには、メディアの人気を得るために度を越した「嘘」に騙されないようにすることが必要だと訴える (⑨)。

そのうえで、聖パウロの説く「死の真実」(⑩)とは、カプルを例にとれば、肉体は土に帰る運命にある (⑪) もの、それぞれの関係者にとっては、父の死、夫の死、祖父の死、友の死、親族の死、仕事仲間の死であり、それぞれのコミュニティとの別離であること—すなわち社会的存在としての死—を論じる (⑫)。そのうえで、遺族の喪失に深い配慮を行うべきだとする (⑬)。

さらに死の特徴として、関係者に対しては「悲劇を持ってきてそこに置いていく」のに対し、関係者以外にとっては容赦なく変わらぬ日常が始まるという特徴に触れ (⑭)、それら「死の真実」に意識的であるように説いた。

また、「アドラ」とその「臣民」とのやり取りに触れ、「私たちはここにいる」という言質は、まさに参列者としてともにこの屋敷の悲劇を取り除くことを宣言しているのだと訴える (⑮)。

さらに、別離の悲しみは喪に服す参列者にとっては、遺族の悲しみを押しはかる障害になるので控えるべきだと聖パウロの教えを敷衍したうえで (⑯)、ほとんどルーティングといつていいほどのニイレンジャ・クランの人々の悪行

に、警告している (17)。

最後には、三度聖パウロの言葉によりつつ、イエスとともに、チャールズ (カブル) のよみがえりを信じることばで締めくくっている (18)。

その後、「信仰告白」を経て、棺が墓穴に運ばれる。私も慣例にならって、棺のあとを追ひ、墓穴の前の最後の祈願と讃美歌のあと、一掴みの土塊をカブルの墓穴にむけて振りかけた。その横では、屈強な制服姿の警察官が、同じように土塊を投げかけてから、私に向って目くばせをし、「わがOBの埋葬に参列してくれたことに感謝する」と述べた。それまでのウガンダでの生活で、警察官からここまでシンパシーのこもった目で見つめられたのは初めてであった。

おわりに

以上、録音資料を書き起こしたテキストに解説を加える作業を通じて、独立前から活躍した、ひとりのコロニアル／ポストコロニアルエリート の埋葬儀礼を具体例としてできるだけ詳細に検討してみた。もともとが牧畜民であり、近隣のバンツーと比べるとクランの観念や統合原理がそれほど強くなかったと想像されるアドラにとって、葬送儀礼の喪主がクラン、という現状がいつのころか定着したのはよくわかっていない。おそらくは現在もカリモジョンがそうであるように、遺体埋葬をしなかったであろう原集団がいつごろから埋葬慣習を受け入れ採用したのか、という点も含め、比較民族誌的な研究成果が俟たれるところでもある。クランを単位として法的問題が処理される現状の考察も必要だろう。

しかも、今回取り上げた2002年の葬儀を起点にするとごく最近誕生した「ティエン・アドラ」が主に取り仕切ったカブルの埋葬儀礼は、例外的なほどにウガンダ教会と「ティエン・アドラ」という二つの両輪が組み合わさったプログラムのもとですすめられた。また、随所で確認されたように、ティエン・アドラ

の多くの慣習プロトコルは、ブガンダ王国をかなり忠実に模したものであることが推測され、詳細な比較検討をしてみる余地が残された。

葬儀は、死者の社会的な存在としての役割が集約される、という。その意味では、今回のカブルのケースでは、カブルがもっとも大きな権力を握っていたはずの現役時代の警察関係者は弔辞を読んでいないとはいえ、いくつかの社会的存在としてのカテゴリーに分けられる式次第が構想されていた。

数え方にもよるが、15人以上ものスピーカーが立ったこの壮大な埋葬式も、
I クラン関係者（とくに居住地のチーフとクラン・ヘッド）、II 姻族関係、
III 仕事関係（この場合は TASO と技術訓練校関係）、IV 地方行政関係 V
ティエン・アドラ関係（文化相、首相、アドラ）VI 教会関係といった骨
組みで組み立てられていたのである。これは、ポストコロニアル・エリート
の埋葬儀礼のある意味では典型とみてよからう。この構成から、Vを除くと、
ほぼ都市のプロテスタント信者のポストコロニアル・エリートの葬儀の式次第の
モデルが出来上がり、さらにこれからⅢを除き、Ⅳの規模を狭くすれば、現代
アドラ人の村人の葬式の式次第が出来上がる。

その意味では、規模の違いや、弔辞を読む参列者の顔ぶれの豪華さは群を抜
いていたとはいえ、死の前にはまさに平等なのであり、葬儀は似たような形で
しか開催されえないともいえる。なかでも、随所でうかがうことができる、故
人の性格の投影は、ネガティブなものも含めてその社会的な存在の最後を飾る
のにふさわしいものとなっているともいえるかもしれない。カブルについては
成功したとされているが、姻族との関係に不可避免的に悩み、また、かつては
一世を風靡したといわれるニイレンジャ・クランの一族が、あたかも盗賊に墮し
ているかのような様子が参列者のコメントから読み取れるのも、人生の無常を
感じさせる一側面ではある。

モダンな、と形容される大立者の死ほど、その後の遺産の配分や後継者問題
で揉めることが多い。具体的事例は複数記録されているが、それらの詳しい検

討は本稿の範囲を超えるので、また他日を期すことにする。

注

- (1) アドラは、ウガンダ東部、トロロ県を中心に、ブタレジャ県、ブシア県、ブギリ県になど住む西ナイル系民族。アドラの人口は2002年の推計で359,659人とされている。彼らの居住地を観念的に「パドラ」と呼ぶが、現在行政的にはトロロ県キソコ郡を指すことが多い。Greenberg [1963] の分類に従えば、ナイル・サハラ (Nilo-Saharan)、東スーダニック (Eastern Sudanic) のうちのチャリ=ナイル (Chari-Nile) である。その下位区分は東・西・南ナイル系に区分され、西ナイル系は、(1) ブルン (Burun) 系統の言語、(2) シルック、アルル (Alur)、ルオ、ジュル、ボルなど、(3) デインカ、ヌアーの三つの下位区分に分類されている。(2) を特にルオと呼び、アドラはこれに含まれる [Greenberg, 1963: 85-86]。アルルやケニア・ルオ (Kenya Luo) とも親縁性が高い。
- (2) たとえば、長島 [1995: 51] は「宇宙論」の要素として、「善悪」「生」「死」「楽園 (至福の国)」「地獄 (冥界)」「前世」「来世」「神霊」「運命」「運勢」「正義」「邪悪」などの概念をあげる。
- (3) この人物との生前のかかわりについては梅屋 [2011] を参照。
- (4) 本稿では録音資料を逐語的に書き起こしたものをテキストと呼ぶ。テキストについては、別に若干の考察がある [梅屋 2009, 2014] が、ここでは、何語にせよインタビューの録音資料を逐語的に書き起こしたもの、と理解しておけばよい。
- (5) オイといっても、本来ならば Daughter's Son であるオケウオ (*okewo*) が儀礼において大きな役割を果たすことは、梅屋 [2014, 2015] で示したとおりである。ただし、これらの区別は現在ではなかなか困難になってきている。
- (6) 訃報を聞いた私の調査基地、グワラグワラでも人々の反応はさまざまだった。ナブヨガの警察で働いていたことのあるアスカリ (警備員) のオウォリ=オダカ (Dominic Owor-Odaka) は、カブルを自分の「OBだ」と表現した。詳しい考察は別稿にゆずるが、OBという概念は、ほとんど関係のない人間同士をつなぎ合わせるネットワークとして非常にうまく用いられている。
- (7) 楽団は、堅い板に木製のばちを打ち付ける打楽器テケ (*teke*)、ロングドラム、フンボ (*fumbo*)、弦楽器トンゴリ (*tongoli*) からなっている。
- (8) アジョレにはいくつかの種類があり、地域や楽団によって傳承されている。以下はそのうちの一部である。

...yamo obedo gima rach kada wa iywaki riyamo yamo rach!
watero gwendi I wang kachgi ndyegi ni ywakiriyamo yamo rach !
yamo oweyan paf ngata konywol !
yamo rach !
eeeh! eeeh!ereba!
Akwogere gi yamo!
yamo rach akwongere
gi yamo !
yamo rach omiyan
adong pa' akinywol yamo rach!
achero ma e chago anorigine saume orumo!
achero ma e chago asangala gine chieng owango
eeeh! eeeh! eee! chieng owango!
achero paran mageno chieng owango!
achero eeah!
mageno chieng owango! achero mafwok both mere paran chieng owango!
achero chieng owango!..

[邦訳]

…死のことは考えたくもない、われらがその悲しみにすすり泣いているときにさえ、それは考えたくもない！
私たちは祭壇の入り口で鶏と山羊を供犠して、死の悲しみにすすり泣いている、しかし死は考えたくはない！
死は私を取り残す、子供もつぐれない男のように！
死は、悪である！
エー！エー！エレバ！（嫌悪をあらわす擬態語）
もうまったくいやになる
私不毛な男みたいだ
死は悪だ！
私が誇る人は逝ってしまった
私が愛用したアチェロ（食事に用いる皿）も日光でからからに乾いて
エー！エー！エエー！（すすり泣く）
私のアチェロが日光でからからに
アチェロ、エー！

愛用の皿がひからびた！

私の友のアチェロも、日光でひからびた！

アチェロが、乾いた！…

※ アチェロは、姻族を迎え食事を供するときだけ用いることになっている素焼きの皿のこと。

...olelo! olelo !

sawa oromo ma Kaburu kodwoko !

Kaburu kodwoko!

buli oringo ma Kaburu kodwoko?!

mama!

buli ogwak ma Kaburu kodwoko!

kelo gimoro ochwowo wangan!

Kaburu kodwoko omiyo omin baba chwowere gi tong , woo ga yamo rach!

lelo!lelo!lelo!

buli omono wangan akinindo!

oyayo! ya! ya! yaah!

eeeh! lelo! lelo! ereba !

Kaburu oywak in mamaye! tho lith !

obedo ned ma Kaburu ywak ni tho lith ?!

ani bende onyewan anyewa!!

obedo ned ma Kaburu ywok ni mamawe tho lith ?!

ani bende onyewan anyewa!!

obedo ned ma yach chwowere gi tho?!

ani bende onyewan anyewa!! ...

[邦訳]

…オレロ！オレロ！

カブルが帰らぬ人となったこのとき！

カブルは帰らない！

ブリ（葬儀を知らせる太鼓）は、カブルが帰らないことを知らせるものか？！

母よ！

ブリもカブルが帰らないことを知りむせび泣くようだ！

私の目は、射貫かれたようだ！（一家の主が死んだ喪失感の含意）

カブルは帰らず、オジたちは互いに殺し合っている、ああ、死は悪だとも！

レロ！レロ！レロ！

ブリが鳴り響き、私はこの耐えがたい時間を眠れずに過ごす！

オヤヨ！ヤ！ヤ！ヤア！（復讐の意図を含んだかけ声）

エーエ！レロ！レロ！エレバ！

カブルは泣いた、死は耐えがたい苦しみだと！

私もブリにあわせて歌う！！

カブルを泣かせる一体何がおこったというのか？！

私もブリにあわせて歌う！！

起こったことは、若者たちの殺し合いか？！

私もブリにあわせて歌う！！…

以上の歌は、それぞれ別の村で再録したものであり、担当する楽団やその村によりバリエーションがある。

- (9) クラン・リーダーは、広義のものは、クランの役職にあるもので、郡や準郡などのチーフを含むが、狭義にはクランのトップであり、これはクラン・リーダーのなかのクラン・ヘッドとして弁別されることがある。
- (10) カブルの墓碑には、初代クラン・リーダーと刻まれたが、Oboth-Ofumbi [1960: 74]によると、ニイレンジャのクラン・リーダー（クラン・ヘッド）創設は1933年ということになっているので、カブルの生年（1927年）から考えても、それ以前に誰かいたはずだが、このあたりの経緯は不明。
- (11) ウガンダの行政単位について概説する。過去の行政区分である北部州、中央州、西部州などの州（province）は、現在でも便宜的に言及されることもあるが、行政区としては機能していない。広域なほうから、県（districtと、郡（county）、準郡（sub-county）、区（parish）、村（village）ないし地域（zone）である。それぞれの行政組織が小さいものからLC（Local Council）1（村に対応）、LC2（区に対応）、LC3（準郡に対応）、LC4（郡に対応）、LC5（県に対応）として組織される。LC3以上は有給の地方行政職となり、警察権を有する。準郡の役場にはたいてい拘置所も付置されている。1から5まで、数字がおおきくなるほど範囲が広がる。LCは、もともと、ムセベニ率いるNRA（National Resistance Army）が、地元支援組織として組織したRC（Resistance Council）が1993年公付された地方自治令（Local Government Statute, 1993）によって改名され、1997年の地方行政法（Local Government Act, 1997）により法的根拠を与えられたものである。この1から5に至るLCにはすべて国会を模した議会があり、役職者が選挙で選ばれる（LC、3、5は直接選挙、2と4は間接選挙）。

Local Government Act No.1 of 1997, Section 48 (1997年3月24日公布)によれば、副議長、書記、情報・教育・地域活性化、治安、財政、環境、女性委員会議長、青年委員会議長、障害者対策など国会や内閣を模した役職を設けることになっている。

県の行政上の長は主任行政官 (CAO: Chief Administrative Officer) であり、郡の長を副主任行政官 (ACAO: Assistant Chief Administrative Officer) がつとめ、準郡、区には準郡チーフと区チーフが任命される。保護領時代の名残で、ガンダ語を用いて郡 (LC4) をサザ (*saza*)、準郡 (LC3) をゴンボロラ (*gombolola*)、区 (LC2) をムルカ (*muluka*)、村や地域 (つまり LC1) をムトンゴレ (*mutongole*) と呼ぶこともある。1992年からの「地方分権化政策」により、独立する県が相次ぎ、県の数は年々増加している。2014年現在で 111 である (首都カンパラを除く)。

- (12) 「遺体を見る」ように示唆した。
- (13) この発言で、カブルのクラン・ヘッドの着任年月日が知られる。
- (14) アドラ・ユニオンに登録されているクランは、以下の 53。
 1. ロリ・ムスグヤ (Loli Musuguya)
 2. ニイレンジャ=チャック=チェウオ (Niirenja-chak-chewo)
 3. ラモギ・ワンゴロ (Ramogi-Wangolo)
 4. ベンド・ゴリア (Bendo-Goria)
 5. コヨ・アララ (Koyo-Arara)
 6. デ・ムブルク (Dde-Mbuluku)
 7. ジエップ (Jiep)
 8. ニャケノ (Nyakeno)
 9. ナミ (Nami)
 10. パゴヤ (Pagoya)
 11. コッチ (Koch)
 12. パレメラ (Palemera)
 13. パニヤングウェ (Panyangwe)
 14. コイ=カタンディ (Koi-Katandi)
 15. コイ=パワンガラ (Koi-Pa' Wangara)
 16. アモリ=ムグル・カヨロ (Amor-Mugulu Kayoro)
 17. アモリ=カセデ (Amor-Kasede)
 18. アモリ=パセニヤ (Amor-Pasenya)
 19. アモリ=ポラミ (Amor-Polami)
 20. アモリ=ティキディエギ (Amor-Tikidiegi)
 21. アモリ=ポリアング (Amor-Poriang)

22. キジュワラ＝ウオダクウイヨ (Kijwala-Wodakwoyo)
 23. アモリ＝カグル・アドゥンド (Amor-Kagulu Adundo)
 24. ビランガ＝ニャコンゴ (Biranga-Nyakongo)
 25. ビランガ＝オウイニイ (Biranga-Owinyi)
 26. ゲンベ (Gembe)
 27. モリワ＝グマ＝マラソング (Moriwa-Guma-Malasongi)
 28. モリワ＝スレ (Moriwa-Sule)
 29. ニャポロ＝オランギ、オリゴ、ニャフォンド (Nyapolo-Orangi, Oligo, Nyafwondo)
 30. ニャポロ＝オグレ (Nyapolo-Ogule)
 31. オジライ・ディブウォロ、パラキ (Ojilai Dibworo, Paraki)
 32. オジライ・ディブウォロ (Ojilai Dibworo)
 33. ジョロモレ (Jolomole)
 34. オルワ＝ラパ (Oruwa-Lapa)
 35. オルワ＝デンバ (Oruwa-Demba)
 36. オルワ＝ルシ (Oruwa-Lusi)
 37. ラクウワリ (Lakwari)
 38. ジョパラガンギ (Joparagangi)
 39. クプケシ (Kapuakesi)
 40. カソワ (Kathowa)
 41. ジョパムウォリ (Jopamwoli)
 42. バシギニイ (Basiginyi)
 43. バセンゼ (Basenze)
 44. バグング (Bagungu)
 45. バダカ (Badaka)
 46. カルウォック (Karwok)
 47. カテケコ (Katekeko)
 48. ララカ (Raraka)
 49. バラゴ (ジョウイレゴ) (Balago (Jowilego))
 50. ンガーヤ (Ngaya)
 51. バケンゲ (ジョウイケンゲ) (Bakenge (Jowikenge))
 52. カボサン (Kabosan)
 53. ゲミ (Gem) (ゲミは、2006年になって認定された)
- (15) 1942年にクラン・ヘッドを新しく創設して分裂したオルワ・デンバ (Oruwa-Demba) とオルワ・ラパ (Oruwa-Lapa) は、デンバが東、ラパは正反対の西に頭を向けること

- になっている。以下 Oboth-Ofumbi[1960]にもとづいてそれぞれのクランのクラン・ヘッド創設年をわかっている範囲で紹介する。アゴヤ (Agoya) は、北の方角、クラン・ヘッド創設は 1945 年、アモリ・カグル・アドゥンド (Amor Kakuru Adundo) は方角は西で、同じく 1945 年、アモリ・キジュワラ (Amor Kijwala) は西、1947 年アモリ・オラム (Amor Olam) は西で 1938 年、アモリ＝ティキデイエギ (Amor - Tikidiegi) は北で、1936 年、アモリ＝ムグル＝カセデ (Amor Mugulu Kasede) は西で 1954 年、ベンド (Bendo) は東で 1923 年、ピランガ・ララガン (Biranga Raragang) は東で 1945 年、ジェップ＝オドウィ (Jep-Odwi) は北で、1945 年、カソワ (Kathowa) は西で 1945 年コッチ (Koch) は北で 1908 年 (カクングルの外圧力から創設されたため非常に早期の創設)、コイ (Koi) 西で 1941 年、コヨ (Koyo) は西で 1939 年、ロリ (Loli) は西で 1937 年モルワ・グマ (Morwaguma) は東で 1945 年、モルワ・スレ (Morwa Sule) は方角はおそらく東で 1935 年、ナム (Nam) は東、創設年未詳、ニャケノ (Nyakeno) は東、1953 年、ニャポロ・オランギ (Nyapolo Orangi) は西で 1945 年、ニャポロ・オグレ (Nyapolo Ogule) は西で 1941 年、ニイレンジャ (Nirenja) は西で 1933 年、ジョデ (Jode) は西で 1953 年 (6. デムブルク (Dde-Mbuluku) に対応、いわゆるトーテムがムブルクなので、公式名としたと考えられる)、オジライ・ディブウォロ・パ・アラック (Ojilai Dibworo pa Arak) は東、1933 年、オジライ・ディブウォロ・パ・クウォム (Ojilai Dibworo pa Kwom) は東、1933 年オルワ・デンバ (Orwa Demba) は東、1942 年、オルワ・ラパ (Orwala Lapa) は西 1942 年、ラモギ (Ramogi) は西、1940 年、ゲンベ (Gembe) は西、1945 年。
- (16) これらのクラン内部での裁判制度については Owor [2009, 2011, 2012] がある。
- (17) ムシカは、相続人。ムクザは後見人。詳細は梅屋 [2014, 2015]。
- (18) 当然のことだが、首長クランを自認するニャポロ・クランの人々は、心中穏やかではない。たとえば、マジヤンガの孫娘を名乗る女性は、次のように語っている。「私はマジヤンガの孫娘です。マジヤンガの実子であるアングロ・アマジャンガ (Anglo Majanga) の娘です。マジヤンガはキナラ (Kinara) の息子です。政府の尽力で最近私のオイが跡を継ぐまで、マジヤンガの王位の継承はなされませんでした。儀礼や供犠のやりかたをきちんと知っているひとはもうほとんど残っていません。またマジヤンガの本当の意味での継承者はいないのです。マジヤンガは、ニャポロ・オグレ・クランに属していますが、本当のところどの民族の出身なのかは知られていません。グウェレ出身であるという人がいます。現在モーゼス・オウォリが、王位についていますが、クランが正統的王位継承者として推薦したのはジンジャにいる私のオイであるアレックス・マジヤンガです。」このことは、1998 年 9 月 19 日の選挙時にニャポロから S・K・オロウオが正式な候補としてあげられた事実と矛盾するが、現在のところ、矛盾が生じた経緯や理由はよくわからない。

- (19) HIV キャリアのQOLをサポートするため、1987年にノエリン・カレーバ (Noerine Kaleeba) により創設されたNGO。カレーバはHIVにより同年死去。
- (20) Idi Amin Dada Oumee(1925年-2003年8月16日)。幼名をイディ・アウォ=オンゴ・アングー (Idi Awo-Ongo Angoo)。生年については諸説あり、1924、1925年あるいは1928年という記述もある。西ナイル県とスーダンの国境近辺のコポコ出身といわれる。カクワ人の父とルグバラ人の母の間に生まれた。民族をまたがりイスラム教を紐帯とするコミュニティ、通称ヌビとして育った。1946年よりKAR (King's African Rifles) に在籍し、ビルマ戦線に参加、1949年の世界大戦終戦まで前戦にいた。マウマウ運動鎮圧に参加(1952-1956)。中尉となり、保護領時代ウガンダ人としてただ2人大英帝国より将校の職権を与えられていた。彼があるときから自称し、他にも強要した呼称は、His Excellency, President for Life, Field Marshal Al Hajji Doctor Idi Amin Dada, VC, DSO, MC, Conqueror of the British Empire in Africa in General and Uganda in Particular。VC (Victoria Cross) はヴィクトリア十字勲章、DSO (Distinguished Service Order) は殊勲章、MC (Military Cross) は、従軍十字勲章の略。ただし、アミンがこれらの勲章を実際に授けられた記録はどこにもないといわれている。大統領としての任期はシンガポールにおける英連邦会議出席中のオボテ大統領からクーデターにより政権奪取した1971年1月25日からオボテ元大統領がタンザニア軍の協力を得た反乱軍によって敗走する1979年4月11日まで。その後サウディ・アラビアに亡命。亡命時の約束を遵守し長らく沈黙を守った。2003年7月下旬危篤が伝えられた。当時その体重は220キロを上回っているといわれ、透析しながら意識不明と回復を繰り返し、二回の腎臓移植を敢行するが功を奏さず、2003年8月16日午前7時(東アフリカ標準時間)死亡。ウガンダの歴代元首としては唯一国葬の対象とならなかった。
- (21) のちに別の機会にママ・ジェシカを訪ねた折には、ジェシカは壁にかかった息子たちの写真を指しながら「すべて私を残して死んでしまった」と、子に先立たれた母と、残された者の悲哀を語った。
- (22) 記録によると、12:30ごろ。同時にゴドフリーらが呼ばれ、棺を屋敷のなかに運び入れた。
- (23) オボス=オフンビヤセム・K・オフンビについては梅屋 [2011, 2016] 参照のこと。
- (24) 頭蓋骨がすかすかになるという癌の症状は、私はこれまでに聞いたことがないので、この発言を聞いて私は大いに驚いた。
- (25) Oboth-Ofumbi [1960] には、かつてはジョチェンビ (*jochembi*) という特定クランがあったとしている。また、墓穴を掘る作業が「死」と緊密に関係する若干不吉なものであると想像されるような記述がある。また、単純労働化した現在でも、参列すべき故人のクラン・メンバーに委託するのは一般には「非常識」ととられる面がある。

- ②6 13:00 ごろ、ちょうどこの弔辞のさなか、屋敷のなかの遺体の周囲では、アジョレがふたたび奏でられ、女たちが踊りを踊った。M・C による埋葬儀礼と、アジョレなどいわゆる伝統的な儀礼は完全に併走していた。13:15 分頃、キリスト教者たちが、屋敷の戸口に集まり、まず戸口を、続いて屋敷のなかを祝福する所作を見せた。遺体はすでに棺に納められていた。13:20 になると屋敷のなかから教会関係者に先導されつつ、棺が運びだされた。バイオグラフィが読まれたのは、そのころのことである。
- ②7 アレックス・コウティノ博士 (1959-) は、ウガンダ生まれのインド系医師。マケレレ大学医学部卒。科学修士。南アフリカ、ウィットウォーターズランド大学修士 (公衆衛生)。2001 年より TASO の代表を務める。民間での経験を踏まえてこの NGO を改革した手腕で知られる。TASO の活動を通じて構築されたコミュニティ・モデルは広く活用され、抗 HIV の治療・およびケアの普及に関する功績が高く評価されている。2013 年日本の内閣府より野口英世アフリカ賞受賞。マケレレ大学感染症研究所 (IDI: Infectious Diseases Institute) 特任所長。
- ②8 ガンダ語 (Luganda) で、姻戚関係によって結ばれた義理の兄弟を指す。
- ②9 葬儀の定番である、後出の「テサロニケ人への手紙」第 4 章翻案であろう。
- ③0 例えば、*The Uganda Gazette, Vol. LIV, 21st December, p.890* には、「Mr. K. W. C. E. Owor, Inspector of Police, to be Assistant Superintendent of Police (on trial), with effect from 1-11-61」と記載されている。同じく、*The Uganda Gazette, Vol. LV, p.823* には、1962 年 9 月 22 日にエンテベ空港発、p.881 に 10 月 21 日エンテベ空港着と記録がある。
- ③1 共同訳聖書実行委員会 [2005: (旧) 929-930]。
- ③2 共同訳聖書実行委員会 [2005: (新) 377-378]。
- ③3 ナサー・ンテゲ・セバガラ (Nasser Ntege Sebaggala) は、カンバラで商店を営んで成功したビジネスマンだったが、1998 年 DP (民主党) からカンバラ市長選に出馬して勝利するも、アメリカ合衆国で逮捕され勾留。2000 年に帰国すると、2001 年の大統領選に出馬を検討していると言われていた。その後、2006 年の大統領選に向けた DP の予備選で党指名第 3 位に甘んじると、市長選に転じた。2006 年から 2011 年までカンバラ市長をつとめた。
- ③4 ルーティング (looting) は略奪行為。
- ③5 プロテスタントでは信仰告白と呼び、カトリックでは使徒信条と呼ぶことが多い。ラテン語のオリジナルに対し、教団ごとのいくつかの訳が存在する。ここでは、代表的なプロテスタントとカトリックの訳をそれぞれあげておく。「我らはかく信じ、代々の聖徒と共に、使徒信条を告白す。我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マ

リヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがへり、天に昇り、全能の父なる神の右に坐したまへり、かしこより来りて、生ける者と死ねる者とを審きたまはん。我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交はり、罪の赦し、身体のよみがへり、永遠の生命を信ず。アーメン。(1954年10月26日第8回教団総会制定)。「使徒信条／天地の創造主、全能の父である神を信じます。／父のひとり子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。／主は聖霊によってやどり、おとめマリアから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて死に、葬られ、陰府に下り、三日目に死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父である神の右の座に着き、生者と死者を裁くために来られます。／聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。／アーメン。(2004年2月18日、日本カトリック司教協議会認可)。

参考文献

欧文文献

Greenberg, J.H.

1963 *The Languages of Africa*. Publication of the Indiana University Research Center in Anthropology, Folklore, and Linguistics 25. Indiana University, Mouton.

Oboth-Ofumbi, Arphaxad Charles Kole

1960 *Padhola: History and Customs of the Jopadhola*. Nairobi. Kampala & Dares Salaam: Eagle Press.

Owor, M.

2009 *Making International Sentencing Relevant in the Domestic Context: Lessons from Uganda*. Ph.D. Diss. University of Bristol, mimeo.

2011 Teaching Cybercrime in the Post Graduate Bar Course in Uganda. *African Journal of Crime and Criminal Justice* 2: 79-94.

2012 Creating an Independent Traditional Court: A Study of Jopadhola Clan Courts in Uganda. *Journal of African Law* 56: 215-242.

和文文献

梅屋 潔

1998a 「人が死ぬわけ《死んだものとのつきあい方—ウガンダ・ジョパドラの場合

- (上)》『Sogi (葬儀)』44号、表現社、73-76。
- 1998b 「葬式の意味《死んだものとのつきあい方—ウガンダ・ジョパドラの場合(下)》」『Sogi (葬儀)』45号、表現社、73-76。
- 1999 「起源伝承から『棍棒を携えた闘い』まで—ウガンダ・パドラにおける歴史と記憶」『民俗宗教の地平』宮家準(編)、413-431、春秋社。
- 2007 「酒に憑かれた男たち—ウガンダ・パドラにおける『問題飲酒』と妖術の民族誌」『人間情報学研究』第12巻:17-40。
- 2008 「ウガンダ・パドラにおける『災因論』—*iwogi*, *tipo*, *ayira*, *lam* の観念を中心として」『人間情報学研究』第13巻:131-59。
- 2009 「ウガンダ・パドラにおける『災因論』—現地語(Dhopadhola)資料対訳編」『人間情報学研究』第14巻:31-42。
- 2010 「酒に憑かれた男たち—ウガンダ・アドラ民族における酒と妖術の民族誌」『人間学—内面的な関心の発展と誤読』(中野麻衣子・深田淳太郎編著)15-34、2010年3月
- 2011 「ある遺品整理の顛末—ウガンダ東部トロロ県A・C・K・オボス=オフンビの場合」『国立歴史民俗博物館研究報告』169集:209-240。
- 2014 「ウガンダ東部アドラ民族における *okewo* の儀礼的特権—現地語(Dhopadhola)資料対訳編」『人間情報学研究』第19巻:9-28。
- 2015 「葬送儀礼についての語り—ウガンダ東部・アドラ民族におけるオケウォの儀礼的特権」『森羅万象のささやき—民俗宗教研究の諸相』(鈴木正崇編)風響社、375-396。
- 2016 「ウガンダ元大統領代行、故オボス=オフンビの遺品(I)—1971年英国外遊時のアルバムを中心として」『人間情報学研究』第21号:117-135。

共同訳聖書実行委員会

2005 『聖書』新共同訳、日本聖書協会。

長島 信弘

1995 「オウム事件と現代社会」『へるめす』第56号:50-58。

政府刊行物

Republic of Uganda

1958-1970

Uganda Gazette Vol.LI LXIII

新聞記事

The New Vision、1998年9月16日、'Japadhola to Elect King.'

【付記】

ゴドフリー・オティティ・オボス=オフンビ、ジェシカ・カプル=オウオリ、ジョン・オティティら遺族に感謝する。また、本研究の成立については、笹川科学助成金（13 - 054）に特に感謝する。また、科研費 18720245、24520912、23242055、15K03042、16H05664、16K04126 によっている。記して感謝したい。

（うめや・きよし 社会人類学・アフリカ民族誌）



写真1 墓穴を掘り、棺を仕上げる



写真2 屋敷に安置された遺体



写真3 カブルの遺体



写真4 女たちは小屋の外で待つ



写真5 香典を集める



写真6 墓穴を掘る



写真7 アジョレに合わせて踊る



写真8 アジョレに合わせて踊る



写真9 弔辞に耳を傾ける参列者たち



写真10 埋葬の準備



写真11 一つかみの土塊を投げる



写真12 参列者には警察官も多い



写真13 最後の別れ



写真14 最後の別れ



写真15 遺影も埋葬する

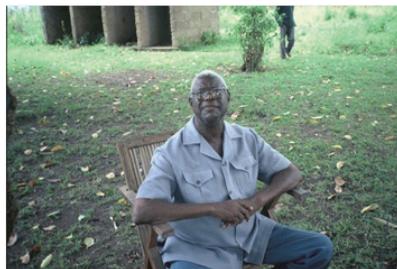


写真16 生前のカブル